廣恵濟急方

中巻

卒暴諸證
外傷之類

十 武
5602
2

岡氏藏書
小野氏圖書

廣恵濟急方中巻目録

卒暴諸證 人平居無事にして忽チ發る病の類を茲に集む

吐血 一丁 人忽血を吐ありО此證一様ならねバ故に七ヶ條に分つ

衂血 十四丁 鼻乃孔より血出るなり

齒衂舌衂 二十丁 はより血出るなり したより血出るあり

小便血 二十三丁 小便より血出るなり

諸失血眩暈 二十四丁 衂血吐血下血金瘡等總て血多く出る病皆めまひしてむちうになる故載

急喉痺 二十五丁 のんど俄にはれふさがるなり О肺絶を附す

武 門 諦 巻 502 2

搶食風 三十丁 口中にはかに黒色の物腫起るなり
真頭痛 三十一丁 頭大にいたみ手足ひえあがるなり
心腹卒痛 三十二丁 むねはら俄にいたむなり
急黄 三十七丁 俄に總身黄色になる病なり
卒瘂 三十八丁 俄にものいふをならぬなり
懸壅垂長 三十九丁 咽のひこ俄に腫るゝなり
指頭卒痛 四十丁 指さき俄にいたむなり
無名腫毒 四十一丁 名もしれざる腫物出来るなり

卒聾 四十三丁 耳にはかにきこえざるなり
耳中卒痛 四十四丁 俄に耳痛むなり
舌卒腫大 四十五丁 舌にはかに腫大になるなり
小便急閉 四十六丁 小便俄に通せず小腹満るなり
脱頷 四十八丁 あごのはづるゝなり
卒然牙關緊急 五十丁 俄に口ひらかざるなり
脱疘不收 五十一丁 だつこう出て入ざるなり
長蟲下出 五十二丁 肛門より長き蟲出てきたるなり

外傷之類 怪我の類を茲に集む

金創 五十三丁 刄にて怪我せしなり
舌斷 五十九丁 舌をきるなり
擦壊 六十丁 すりこかしなり
攧撲 六十三丁 うたれたふれたるへ 墮落 高きよりおちたるへ 壓倒 おしにうたれたるなり
閃挫 ひきちかひたるなり 落馬 むまよりおちたるなり
眼爲物傷 六十七丁 つき目うち目なり
眼睛突出 六十八丁 目の玉とび出るなり
湯盪火燒 六十九丁 湯わくのやけど火にてやけどせし
凍指欲墮 七十二丁 冬月指こゞへおちんとするなり
人咬傷 七十三丁 ひとにかまれたるなり
諸蟲咬傷 七十四丁 諸の蟲にかまれさゝれたるなり蟲ぎし此類を載○蛇人の身に纏を附ス
諸獸囓傷 八十四丁 毛ものにかみやぶらるゝなり

廣恵濟急方中巻

法眼侍醫多紀安元丹波元悳編輯
男安長元簡　挍

卒暴諸證

人平居無事にして忽に發る病をここに載す

吐血

此證一様ならざれバ療法亦同じからず故に七條に分く大略を知らしむ

吐瘀血 人忽血を吐其血の色或ハ黯黒或ハ紫黒色あしく或ハ凝て切餡のごとく或ハ豆羹汁のごとくなる者ありこの時に當てハ或ハ煩悶或ハ

身體清涼ならして氣息微に面白きハかへて停積結聚し瘀血を吐出せるなり此證ハ血多く出るとも妨なし然れども一時に多く出れバ元氣接ざる者あれバ療法を施すべし

療法 山漆根葉ともに用ゆ（圖説後に在り）を自嚼飯の取湯にて送下すべし○又方香附子（薬店にあり）末となし二匁許童子の小便にて送下を良とす○又方茯苓（薬店）にあるの末に香附子の末一匁許宛を米飲にて

用ゆべし○又方花蕋石（薬店にあり）末にして白湯にて服すべし○又方生藕擦り絞りて汁を取童便に和て服すべし○又方韮を搗て汁を取り三四盞を服すべし胸中悶といへども後に必ず愈○又方黒豆一合紫蘇一匁水煎服すべし

虚損吐血 其人いはとなく氣怯形色憔悴或ハ胸懷鬱然飲食とも小風味なく腹ハ饑なからく食することハ不欲なく且物に驚き易く夜快寐ざれ

等の證もい前よありて後よ忽吐血者あり又ハ其以前よ數度嘔吐乃證或ハ度々泄瀉の證有たる後よ卒然吐血或ハ下血する有者あり是ハ虚損吐血とハ血の色鮮紅なるべし

療法 伏龍肝 竈の下正中乃焼土なり極く古きをよしとス 末となし新汲水の中へ入拌淘汰て後よく澄て其上水ふ蜜を加和匀あらせ服して後粥を啜をよしとス

○又方百草霜 釜の臍よ着する墨なり農家雑草を焚たる墨よし 末となし糯米を煮る取湯ふて二匁許を服しよく良なり○又方飛羅麪 羅の盖よ飛て著さる麪なり 京墨 唐墨の上品を用ゆべし無ときハ和墨乃よきを用ゆべし も磨汁ふて二匁許を服すべし○又方人参 焙 側栢葉 焙 圖説後よあり 荊芥穂 茶店よあり 黒焼ふして等分何きも末となし飛羅麪少許を入新汲水ふて和匀く稀糊の如くして服す

虚熱吐血 患人面赤滑澤甚しく或ハ躁悶或ハ喘

息して手足厥冷或ハ小便清澄大便も至つゝか小通し又ハ泄瀉し遂に吐血て不止ハ虚陽乃浮泛るなり血色鮮紅なりとも大切の證なり

療法 乾姜 薬店にあり 黒く炒末となし童子小便に調服せ○又方肉桂 薬店にあり 一味末となし方寸匕許を服せ○又方人尿に生姜の絞り汁を入和匀て服せ○又方獨参湯 方ハ上巻脱陽の條にあり ふく辰砂 薬店 にあ末五六分かを送下べし○又方人参黄芪 薬店 にあり各一匁ヅヽ水煎童子小便を加へ頻〻服してよし○又方手足厥逆強きハ参附湯 方ハ中風に出せり に伏龍肝 前に出せり 末となし服する時點攪用ゆ最良

實熱吐血 吐血口渇く水を飲ことを好ミ或ハ咽痛躁煩大便鞕或ハ閉て通ぜず小便は色赤くして熱く或ハ頭痛する者ハ實熱吐血やゝまするなり

療法 黄連 薬店にあり 一匁水一杯を半分に煎服す
或ハ鼓 納豆なり塩の入たるハ用へからず 二十粒許加入煎用又よし
○又方黄芩 薬店にあり 一匁剉水一杯を半分に煎
じ服す○又方鬱金 薬店にあり 末となし白湯にて
六分許用ゆ○又方山茶花 庭園にあるほど それなり 末とな
し白湯にて服す 一匁ずつ煎じ服すも又よし ○又方青黛 薬店にあり 絵の具
は用ゆる所いろう 二銭新汲水にて服す宜し
をも用ゆよし
○又方黄丹 絵の具に用る品なり 薬店にてたんといふ 光明たん長吉たんなどよし

一味新汲水にて一銭を服す○又方馬勃 後に図説あり
末となし砂糖にて枇杷核大に丸し冷水にて化
て服す○又方黄栢子 倭名志このへい 薬店にあり 一両水に煎
し服す○又方大黄 薬店にあり 一匁末となし生地黄
の絞り汁一合許 大和鏡前の邊にて多く作る 其汁を用ゆへし若生の根無処
にくハ薬店にて生乾地黄を求め一匁入べし 水を五匁許 若乾地黄銭用ハ水を合
五匁入沸煮汁を服す○辣茄などの執辛熱の
物を多く食ひ吐血するハ紅棗核ともふむし

焼に黒く焼き阿煎薬（薬店にあり 名さるぼう）和蝦蟇過し米飲にて服す

大怒吐血 人大に怒る事ありて後煩熱を發し吐血する者あり或ハ胸脇乃次痛満悶あり

療法 南京瓷器を砕き末にし又皂莢子仁（薬店にあり 図説中風に見也）の煎湯にて二銭許を服す○又方青黛（図説まへにあり）二匁新汲水に調服すべし○又方童子小便にて香附子（薬店にもあり）乃末を調て服す○又

方栢葉（薬店にあり 図後にあり）末となし米飲にて服す

憂恚煩満胸中疼痛ある者に最よし

傷酒吐血 酒を常に好む人或ハ連日大飲をなし或ハ甚酩酊して後大に吐血する者あり

療法 生葛根（図説後にあり）搗て汁を取頓に服す立に効あり○又方天南星（薬店にあり）一両剉て豆の大さのごとくし爐灰汁に浸し洗焙て研末となし毎服に一銭自然銅（薬店にあり）を酒にて磨り調て服す

○又方萊服自然汁に塩少許を入て服すも尤よし
○又方赤小豆花せんじ服すも最妙

中暑吐血 夏炎熱の節旅行なとして終に暑毒に中りて吐血する者あり其證氣怯體倦息微に或ハ熱し渇つよく煩悶て吐血するあり

療法 鍋底墨を研細にし井華水にて服すも連進二三度飲て良○又方生麥門冬（図説下にあり）一両許擣て汁を取り蜜一合を入拌て二度に服すべし○又方蘆荻（水邊に生るもの）外の皮を焼灰にし白くならざる様に焼く末にし蚌粉少許（蚌ハ田貝なり焼く粉とし図後に出す）を入れ研白麥門冬（図説後にあり薬店にもあり）の煎湯にて一二分を服す○又方黄連香薷（二味共に薬店にあり）各一匁宛水に煎じ服す

凡何ほの吐血にても暴に血を吐て湧が如くなる者或ハ一口二口よりして一二合漸に一升より數斗に至り氣血脱て危ことは頃刻にあり此

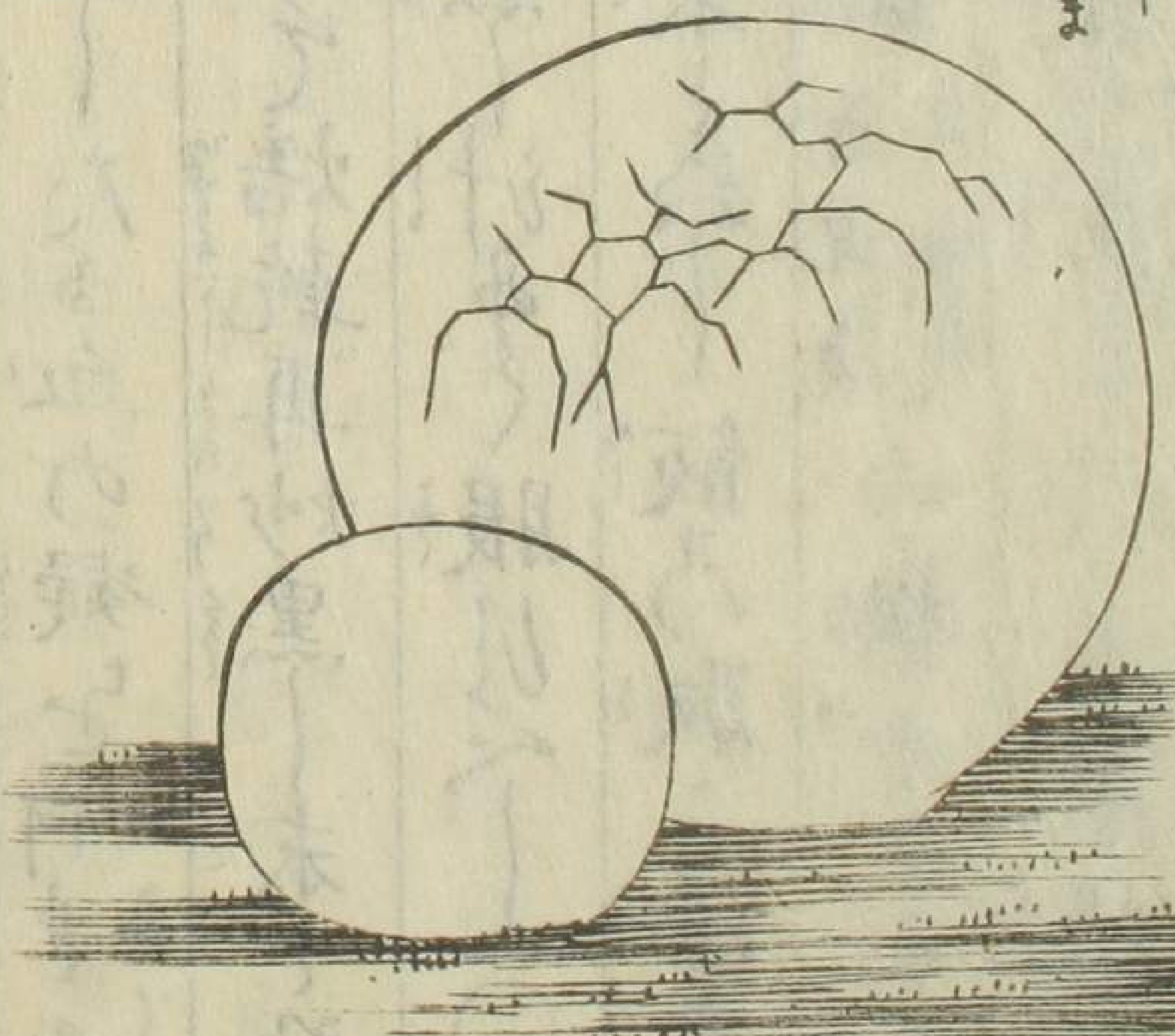
際よ至りてハ何れも此證なくも下ふ載る所の通
理乃方を用ゆべし
通理方　急ふ人参一二匁細末となし飛羅麪一分
温水或ハ井華水ふて病人の好処よ随ひて和白く
稀糊のごとくして徐こと服すべし或ハ人参二
匁を濃煎じて用ゆ○又方何れの吐血ふても
乱髪よくく油を洗去て焼灰し酢ふて服き
べし温水ふても亦よし○又方諸薬用ひて

効なきハ先病人吐出したる血の凝ちを何れの吐血ふても
多く吐出さしむくまれバ凝るのなり火ふて焙乾再炒黒し末となし
三分許ちを麦門冬ふ煎し汁ふく服さくべし○又
方烏賊骨 図説金瘡よ出 ちを末となし飯乃取り湯ふく
服すべし○又方茜草 図説後よ出 の根干するも乃
ハ末ふして二匁ちを服き生なるハ水煎服○又
方櫟漆をのぞてよし百草霜ちを櫟漆よ攪用ゆ
亦よし○又方泊夫藍 つ薬店よあり 一二匁沸湯よ擺

出し用最良○又方白芨和名しらんと云乾たる末もの薬店にあり
やうして二三分童子の小便にて用ゆ

馬勃 和名みゝだぶれ 又けむとし 又山ざま 又ゑぞのふさま 又けむりさけ

大さ鞠のごとくにして甚軽く盈ころろなるを綿のまたたり揉ければほこり出ツ初生の時ハしろくしなり内外ともに黄褐になる林の中又ハ山の崖など濕ある所に生ず古人苔の類とも菌の類なりとも云り



側柏 和名このてがしハ

此樹ひの木に似て枝側生ず人家園庭に多栽るものなり去ながら其枝根の本より四方に叢生して其木振ハ側にして真乃側柏ハ一体の樹振偏側なり和に真の側栢稀なれバこれにてのしるしなく以て代用ゆ功能ハ同じ

山漆

和名もさんしちと云

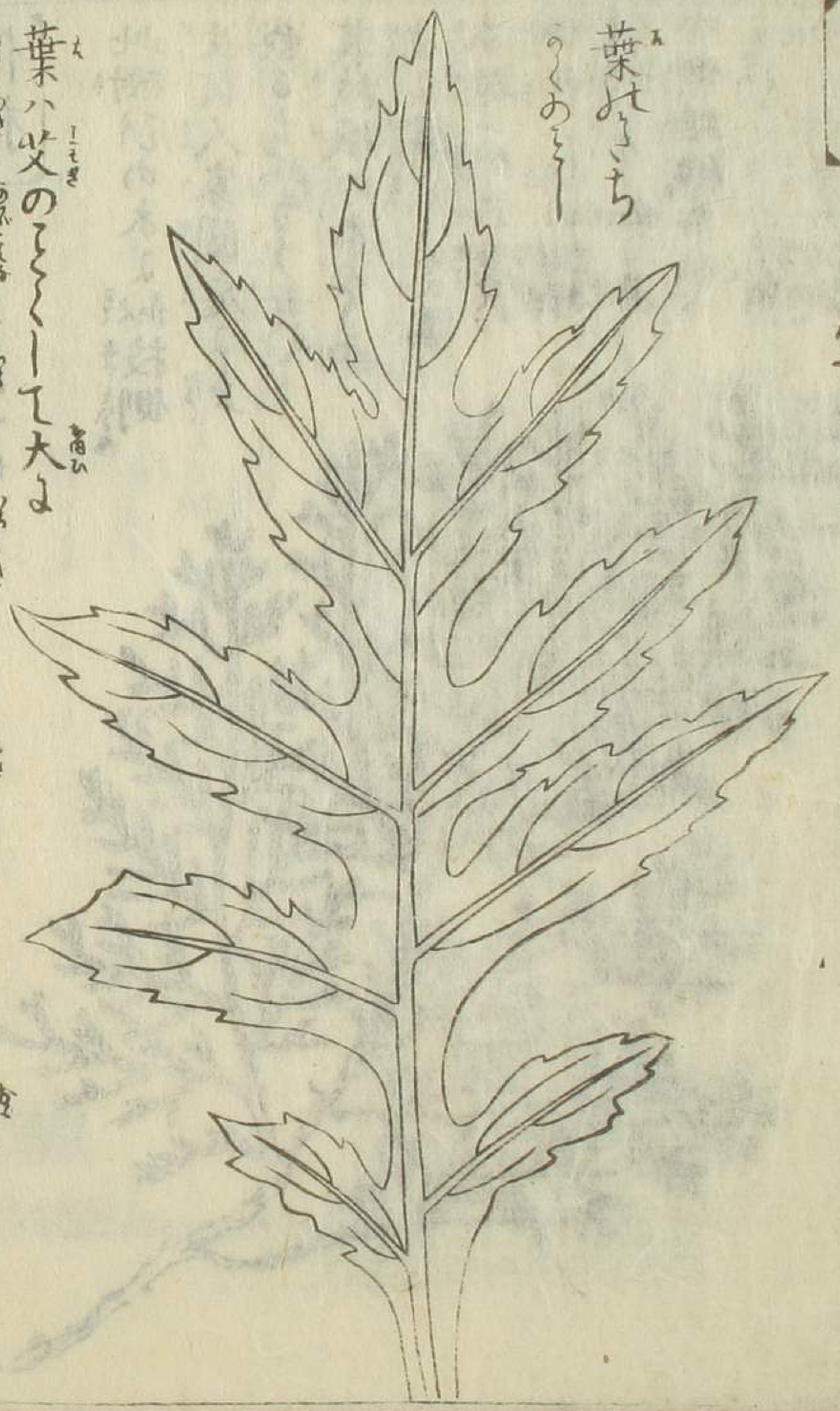
廣三七とハ別種なり

葉ハきちのごとし

葉ハ艾のごとくして大な

夏秋の間花を開き其色黄なり

茎ハ高さ二尺ニ及べり



今人家多く栽る所の物なり

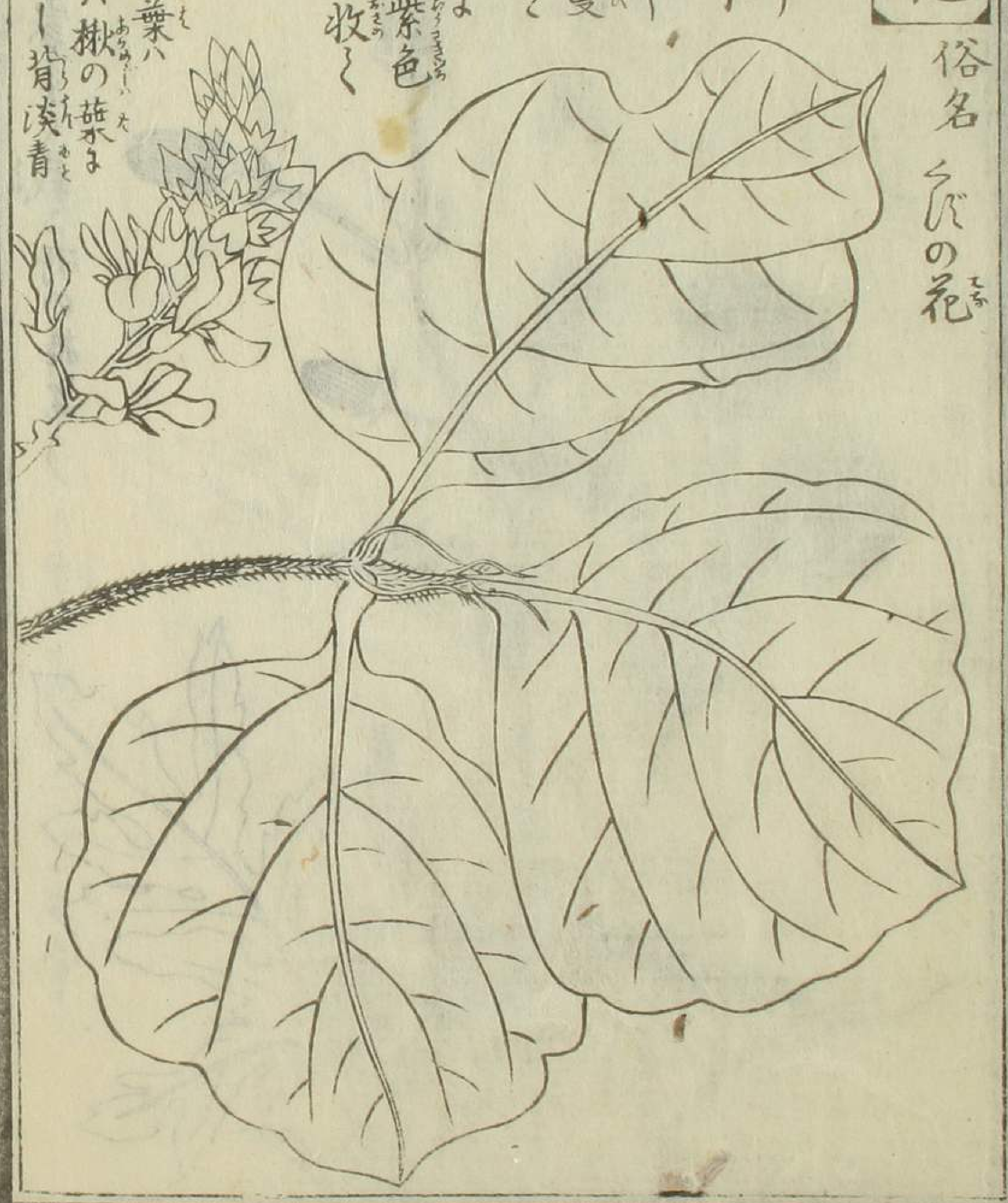
花の状ちくれ

ごとし

葛花

俗名 くずの花

家園にあり山野にも多し其藤蔓延長さ五六丈にして淡紫色なり取收て布袴となす者是なり葉ハ大豆又ハ楸の葉に似て青し背淡青



色なり初秋穂を成して莟累々綴く粉紫色の花を開く状豌豆花に似たり又淡黄色のものあり此花薬に用ゆ

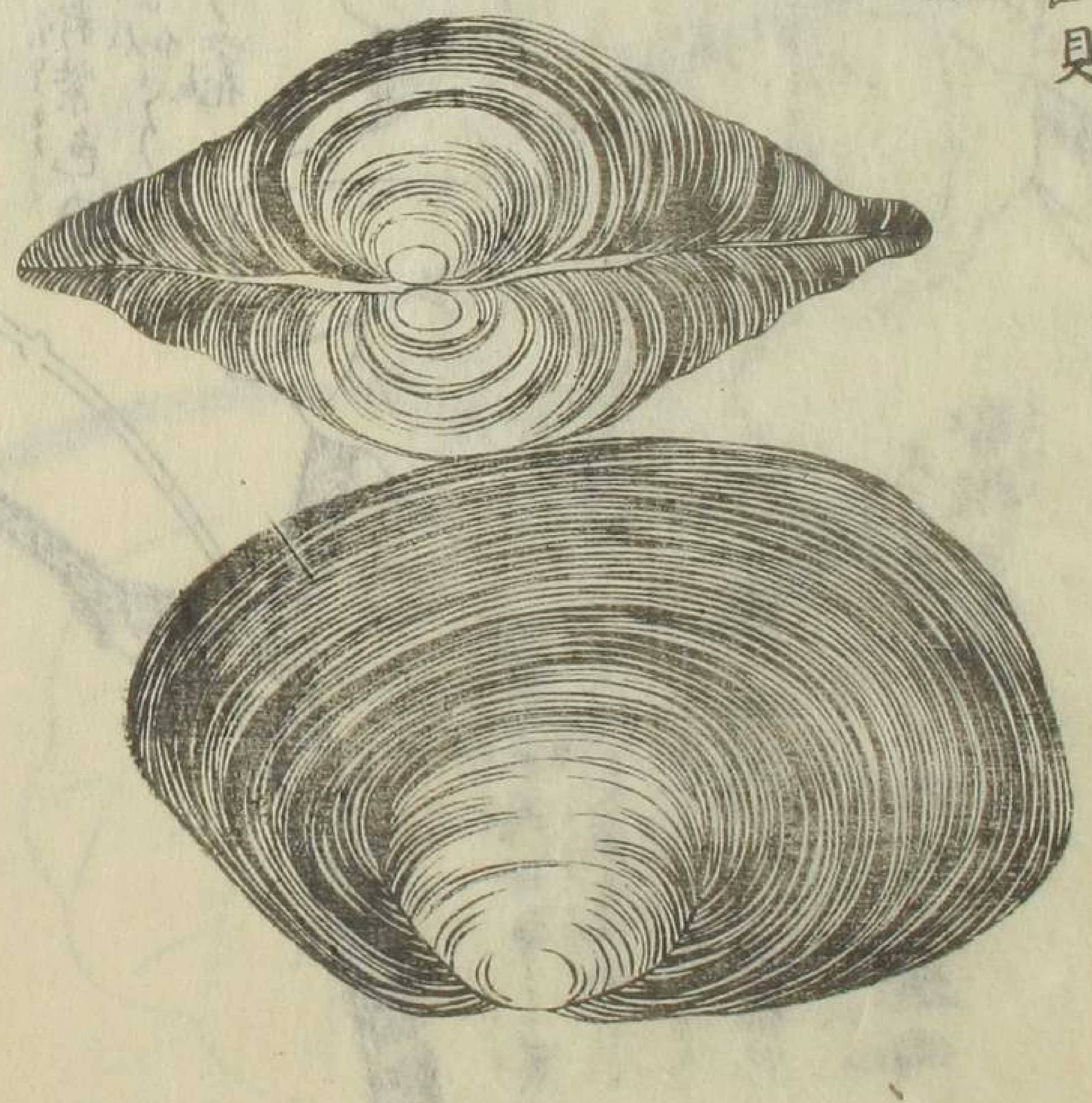
秋の末莢を成す實を結皂莢の如くして其子緑にして扁なり嚼バ腥氣あり其根外紫にして内白長者ハ八九尺に至る冬月掘採て擣爛葛粉を造者是なり

蚌

和名 からす貝 とぶ貝

處々溝渠水田池内に生ず大さ圖のごとくなるより七八寸に至る色黒し海にハ絶てなし

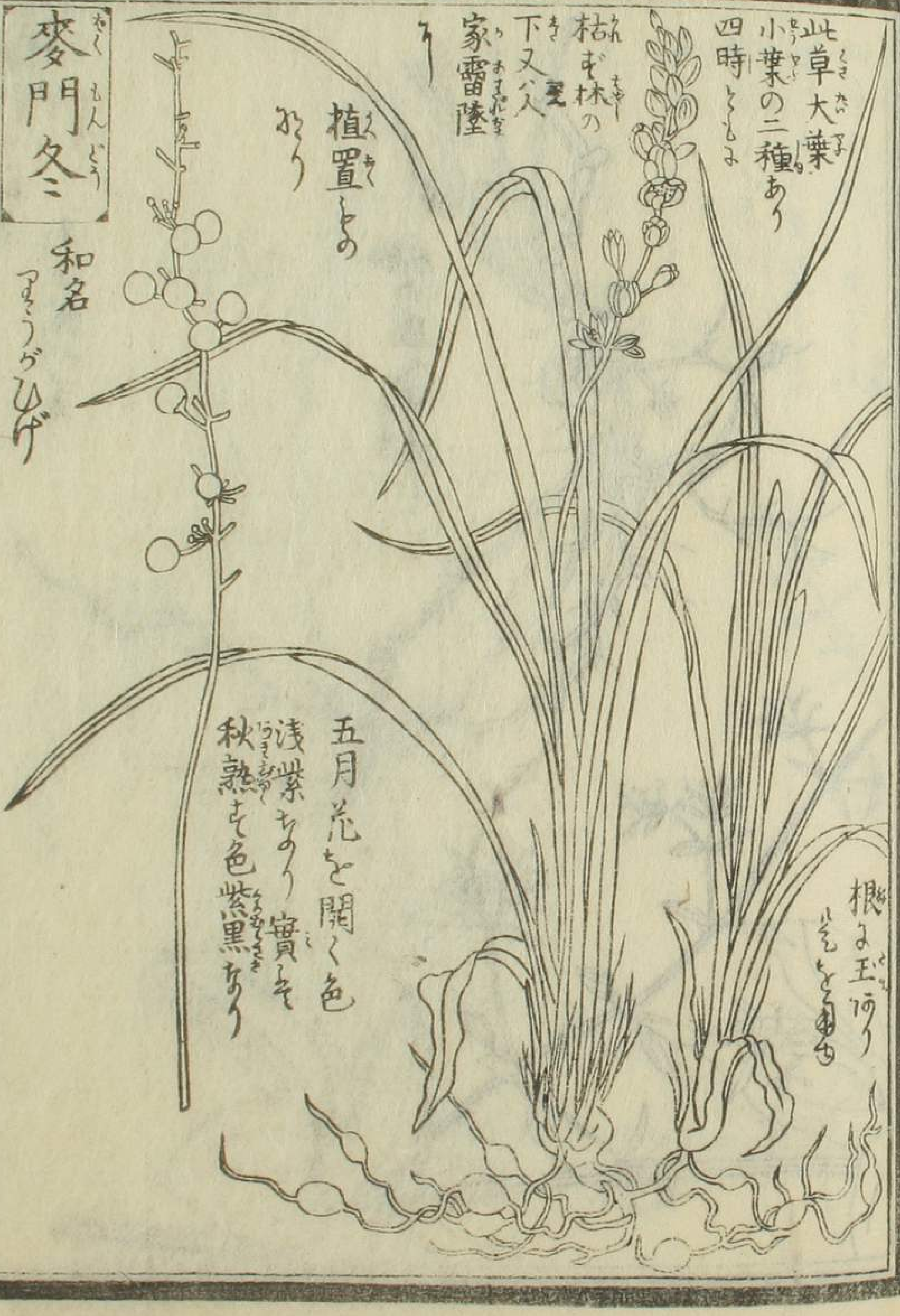
真珠母又蚌と云此と同じからず



麦門冬

和名 やまうぐひげ

此草大葉小葉の二種あり四時ともに枯ず林の下又ハ人家霤陰に植置もの多し



五月花を開く色浅紫なり實を秋熟て色紫黒なり

根に玉有り

茜草

和名 あかねづる

根の図之皆赤し

此草原野に生ず状図のごとく茎葉ともに糙澁七八月小白花を開く根の色赤く其根を取て絳に染るものなり

茎方にして苗延蔓となる

衂血

病状　人卒に鼻孔中より血出て數升に至る者あり或ハ湧が如く出るあり或ハ點滴出るあり或ハ鮮血或ハ敗絮如くのこまりたるあり

療法　石榴花図説後の瓣を鼻乃孔に塞宜し

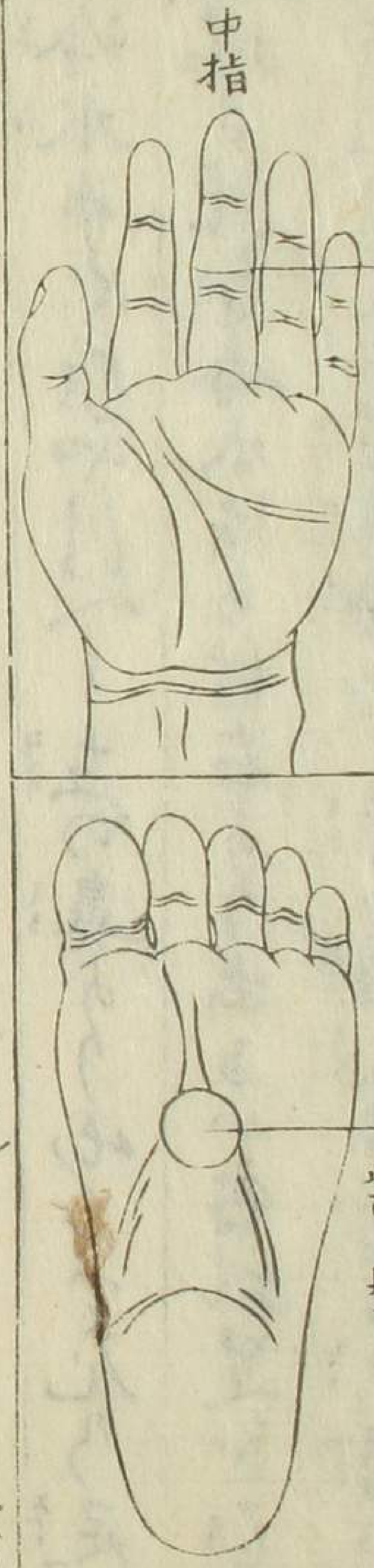
○又方蘿蔔の絞汁を鼻孔の中に滴入てよし

○又方藕を搗碎汁を絞り取く鼻孔中へ滴入宜し　○又方墻頭苔蘚を採鼻孔中に塞て良

○又方車前草図説後にありの葉を揉汁を絞り取り
鼻孔の中へ滴入るがよし又ハ○又方燈心艸
を鼻孔乃中へ填塞てよし○又方蓮房図説後にあり
を火に焼末にして鼻孔乃中へ管にて吹込べし
○又方大蒜一枚細に研餅の如くならしめ銭の
大さにして右の鼻より出るハ右の足心
に貼左の鼻より出るハ左の足心に貼べし両乃
鼻より出るハ両ながら足心に貼置し血止バ水にて

洗去べし○又方何にても紙にても火にやきて其
のけむりを鼻へ入るやうにしてかぐよしむせ
てもやまぬにかぐべし○軽證ハ足のきびすを
冷水にてひやすべし左の鼻より出るハ左乃足
のきびすを冷水にてひやし右より出るハ右の足をひ
やすべし○又方百薬効なき者ハ病人の手乃中指の
節の処を線を用て緊縛るべし若左の鼻孔より
血出るハ右の手指を扎右の鼻孔より血出るハ

左の手中指を扎若左右共に出るハ左右の手
の中指を扎るべし



○又方茅花俗につばなと云 圖説後にありを煎じて多く服
してよし○又方山梔子薬店にあり 圖説後にあり炒黒し末と
なし管にて鼻孔の中へ吹込又外より小紙を

水に濡て鼻上に搭てよし○又方鍋煤を水に
調飲てよし○又方鼻衂多く出て湧がごとく
しても止ざる者ハ何にても大白紙一張或ハ二張
いくへにても摺て十餘層となし厚くして井華水
にて濕し其紙能く濕り透たるを病人の髪を分
て頂心中に貼置其上より熨斗に火盛て出して熨
あて熨斗ぬるくならバ温石にて熨べし暫くして衂
止なり○又方山梔子一味せんじ服せ○又方荊

芥煎じ服すべし○又方代赭石（薬店にあり）末とし
少許を舌上に置べし○又方柳蝨をのみてよし
○又方衂血過多出て昏迷氣つかるゝハ生地
黄搗て汁を取連飲べし若汁を取て遅バ其儘
喫ひ汁を呷且其滓を鼻内へ塡塞くべし若生地
黄無き所にハ薬舗の生地黄を用べし（薬舗にある生地黄ハ干たる物なれバ乃地黄にあらず）○衂血多出て元氣脱
して危きハ前の吐血通理に服薬試用ゆべし

○衂血多く出止ざるハ項後髪際に灸すること三壯
すべし又上星に灸すること七壯すべし（二穴下に圖あり）
酒後衂血　出て止ざるハ胡椒の末少許温酒に入
攪服すべし此外前の傷酒吐血乃薬用べし
入浴衂血　出る事あり辰砂（薬店にあり）の末一二分白湯
にて服すべし紫蘇子煎じ服も亦良
撲墮落馬後衂血　出るハ瘀血上に衝上故なり明礬
一塊其儘病人に嚼しめ飲すべし

石榴

處々庭園にあり木高大なり
又數種あり
大抵地より叢生て小枝甚多し葉は楊に似て短く
楊より薄して色も亦淡緑なり
五月の頃より花を開く
色赤し夏秋に至り
不絶花あり
秋實を結び結實綻て花を開き

和名　ざやくろ

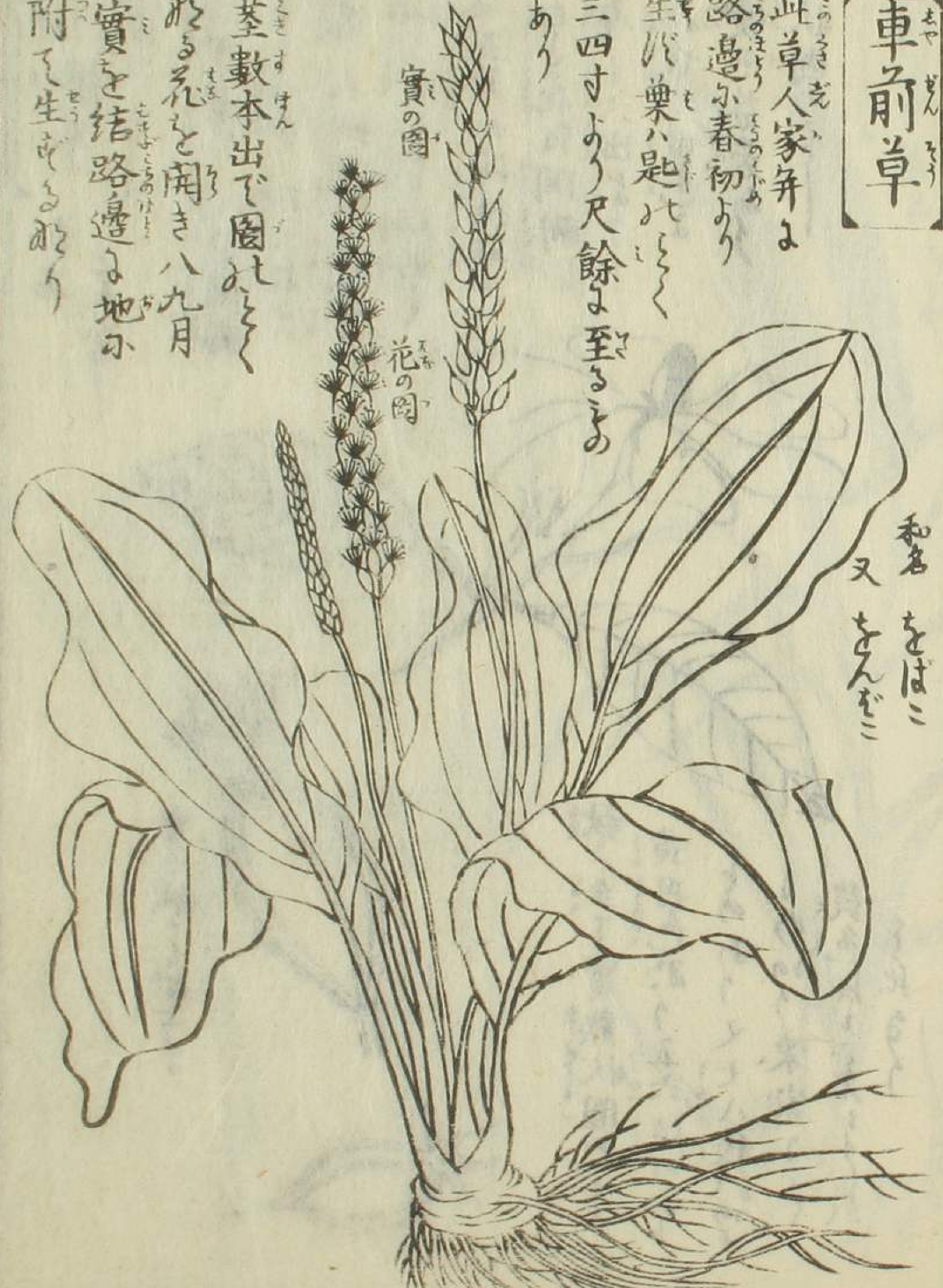
花に千辨の者あり
又單辨の者あり

花實並て生じ實霜後経く拆裂中に數子あり味酸もの
生木に入て用也

車前草

此草人家并に路邊に春初より生じ葉は匙のごとく三四寸より尺餘に至るもあり
茎數本出て圖のごとくなる花を開き八九月實を結路邊の地に附て生ずるなり

和名　をばこ
又　をんばこ



山梔子

和名 くちなし

山中に多し人家園庭にも亦多し樹大なるハ高一丈許葉の状恒山に似て厚く両々相對せ四五月の頃枝頭に白き花を開瓣厚し六出なり花衰く黄色に變せ芬芳あり状圖のごとし

秋に至て實熟状圖のごとし黄丹色なり五六稜のあるものあり又七八稜あるものあり染家に多く黄色を染るにもちゆれ をなすなり

白茅

和名 ちがや

春芽を出す針のごとしほそながくして後に白き花を生じ葉ハ薄に似く小なり根花共に薬に用ゆ處く原野に多し小児好で玩ぶもの是なり

蓮房

はすのみのからなり 軸付より茎を去房ばかりを用ゆ

項後髪際穴

此穴ハ項の後髪れえん際両筋の正中陥所よあり後の髪の際を定むる法ハ前巻中風百會の條よ出

上星

此穴ハ前髪際より上一寸よあり此寸ハ定る法并ニ前の髪際を定法皆中風百會ハ穴の処よ委しく記せり

歯衄舌衄

しよりちいづるなり
ぜつよりちいづるなり

歯衄 歯縫齦との間より血出るなり

療法 付薬ハ蒲黄（池沼よ生ずる蒲の穂よ有る黄色なる粉なり薬店ふもあり圖説後の金創乃條よあり）炒焦末となし付べし○又方槐花（圖説下よあり薬店みもあり）炒末ふし付べし○又方香附子（薬店よあり）炒黒し末ふして揩べし○又方薺苨汁よ塩を鹹きほど入て漱べし嚥てもよし○又方髪の毛を焼灰となし一銭許醋よ調て服し且付てよし○又方

蟾酥（茶店にあり）を末にして紙撚の端に少許を傳て血出る処を見定按付べし立止（蟾酥ハ咽に入べからず）

凡人口より血出て吐血歯衂分ち難ハ涼水にて漱べし血頃止ハ歯衂也止ざるハ吐血也

舌衂 舌より血出て縷のごとくなるなり

療法 大抵前に同じ○又巴豆（茶店にあり）を研爛て紙に壓碾り油を取其紙にて撚子を作り燈にて付て吹滅其煙にて舌の上下を薫ぶべし自

然と止なり

歯を抜て血出て不止

療法 歯衂に同じ

槐花 和名ゑんじゆ　今の俗ゑんじゆと云　大葉小葉の二種あり葉ハ皂莢の葉のごとくにして深緑色木ハ甚高く大なるものなり　夏淡黄色の花を開く花の状紅豆に似て細く簇開くもの図のごとし此花を取て用ゆべし

小便血（小便に血まじるなり）

病状 小便忽に鮮血出る事あり

療法 螺靨草（図説下に出ス）汁を取少蜜を加へ水にて飲下すべし○又方 益母草（図説ハ前巻疔毒にあり）搗て汁を取一合許を服すべし○又方 鬱金末（薬店にあり）一匁 葱白（ねぶかの青み）三茎 水二杯を一杯半に煎じ用ゆべし○又方 車前草（図説前の衄血にあり）搗汁一合を服すべし○又方 琥珀（薬店にあり）末として燈心

の煎汁にて二匁を飲べし○又方髪灰頭髪を油氣無様洗べし焼て灰とかしたるなり二匁白湯に酢少許を入て送下すべし○又方皮膠茶店にありすき透る物を用べし櫛手と云ものよし最も炙て水に煎じ服すべし

螺靨草　和名　まめつる　又　まめこけ

處々陰の石上又ハ樹上に附て生ず蔓草なり葉ハ貝の靨のごとし大豆を二つに割たる大に似て其色も青豆の色の如くにして滑澤あり

諸失血眩暈

吐血下血鼻衄舌衄歯衄損血出て金創などの血出ること過多なれバ皆眩暈して昏迷に成る事あり

療法　茅根前にある白茅の根なりを焼烟の中へ酢を灑て其臭気を病人の鼻に嗅すべし且冷水を病人の面に噀て驚しむべし○又方辰砂乃末茶店にあり二三分白湯にて用ゆべし○又方石を焼き

赤くして酢を盆内に盛置其中へ右の石を入焠き其氣を嗅せてよし○又方好墨の濃く磨たるを口に灌のませてよし○又方荊芥茶店にあり末となし白湯にて送下べし○醒來後速に伏龍肝竈の下の焼土なり末となし湯に拌て飲むべし○當歸川芎二味各一匁二品共に茶店にあり水に煎じて飲むべし○出血珠過多命危は急に人參一味濃煎じ用ゆべし或ハ人參一二匁細かなる末となし飛羅麪一銭温水に和白稀糊のごとくなし先徐々に飲しむべし○洎夫藍茶店にあり一味煎じ服を急ぐときハ擺出し用てよし凡失血乃證通用て良此外前の吐血通理の條と參考べし

急喉痺　肺絶を附す

病状　暴に咽喉腫痛て閉塞水漿通らず言語ならず或ハ牙関噤急是なり早く理療せざれハ死

療法　微しく咽喉腫痛事をおぼへバ急く釅醋を口中に含く後通口嚥下遍し或ハ数含嗽すること汜ハ痰涎を吐出て愈るなり酢なき汜節ハ冷水にて含嗽するもよし○又方商陸図説後多少によらず剉酢にて濃煎し

つめて喉の外へ塗傳べし○又方萊菔乃絞
汁を徐こと嚥下て良也⦿又方枯礬（茶店にあり）を
末となし鶏子清に調匀喉中へ灌入て妙なり
○又方蓖麻子（図説下にあり）乃殻を搥砕殻を去く
中の仁ばかりを取研く末となし紙に捲て筒
のごとくし焼て烟を病人鼻孔より吸入さしむ
べし○又方巴豆（茶店にあり）の油（中のみをとり壓砕バ油出ス）の附
たる撚子紙に火を付吹滅て其烟にて病人に

鼻を薫ること一時許にして口鼻より涎を流
し牙關自ひらくべし○又方甘草の末一匁許
管にて咽に吹入てよし○又方芒硝（茶店にあり）乃
末少しづゝ吹入もよし⦿又方姫萬兩（下に図説あり）の
根を水に煎じ服すべし○又方喉俄に腫塞りて
危殆に至ハ巴豆一粒皮殻を砕去く針をとふして糸
を名の巴豆につけ病人に呑せしむへし巴豆
咽に入を覚ハ急に糸を牽く出しめ先とる略

ハ塞腫といへども咽通ずるに至らざるべし
○鍼藥共に効なき時ハ乾漆を焼く烟を管にて
鼻より吸入しむべし乾漆なき時ハ何にても
も髹器物を焼て宜し

蓖麻子（ひまし）

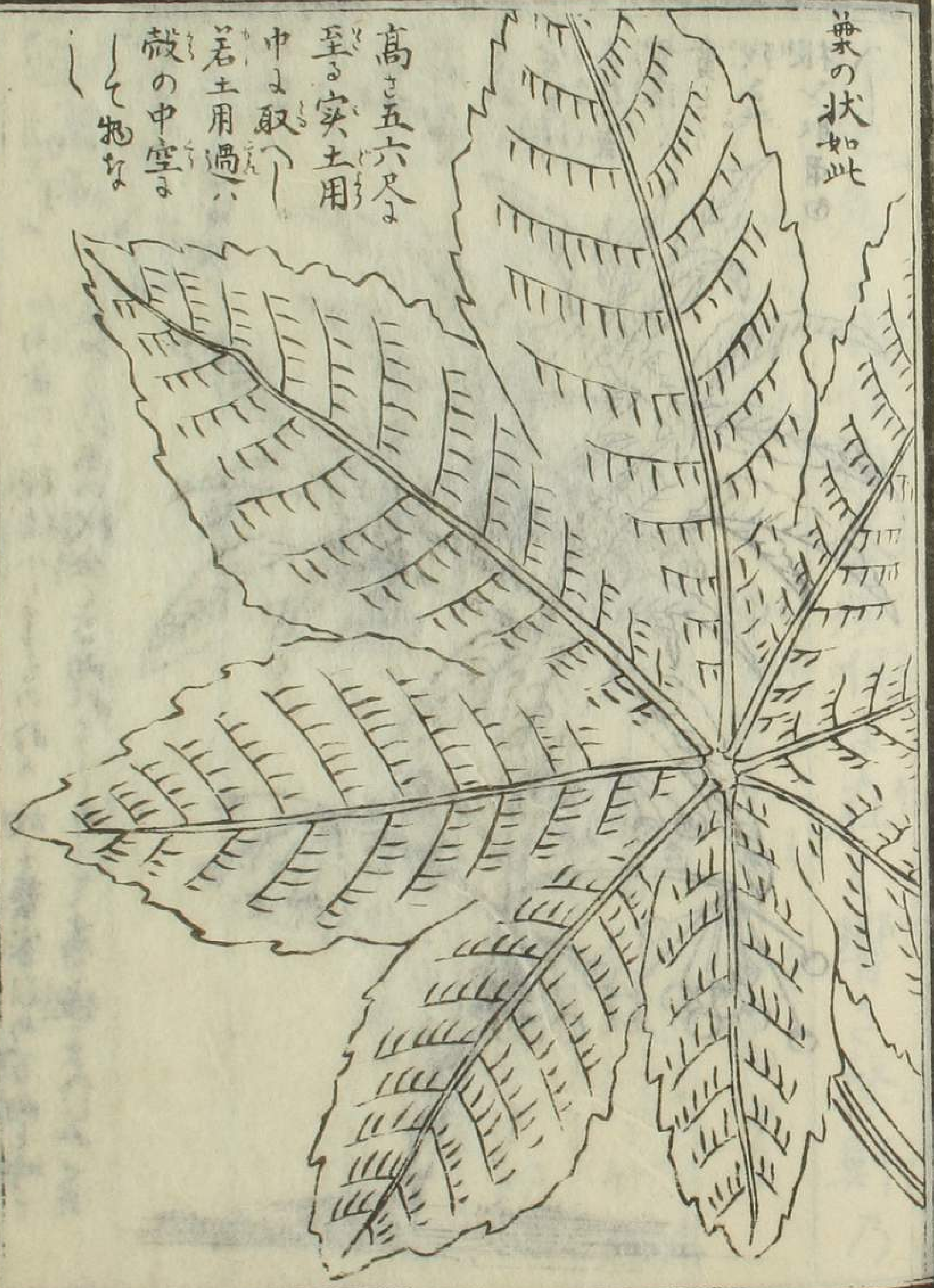
和名 やうごま

此邦此仁を搾て印肉の油とする物なり

人家多く栽置所乃ものあり

此草春の末苗を生じ茎赤く葉ハ麻のごとくにして大し茎より枝を生じ黄色の花を開き實ハ圓のごとく刺あり此実を劈開けバいくつも大豆ほどの子あり子ハ斑ありて牛蜱に似たり

状かくのごとし



葉の状如此

高さ五六尺に至る実土用中に取べし若土用過ハ殻の中空にして物なし

姫萬両

夏枝の頭に小白花を開き實を結ぶ平地木の實のごとく色赤し四時落ることなし実を結べば其枝の葉皆落して實ばかり残る此根を取用ゆべし

白両金の一種倭小なるものなり故に藝家ひめ万両と呼て盆玩とす其木の状全く万両にたがはずして高さ僅に尺にみたず

肺絶　急に咽喉腫塞痰喉に在て響き聲鼾の如く面色青惨なるは肺絶なり至て危篤なり

療法　急に獨参湯を濃煎じ生姜の絞汁と竹瀝少許を加へ頻に服さしむべし若遅きときは十人に一人も活べからず　竹瀝を取る法は巻中風に出す

搶食風

病状 人飲食するときハ忽然口中に大拇頭或ハ小指の大或ハ大豆小豆ほど大さに腫起つて色黒くして物を呑ことならぬハ搶食風と云

療法 急に指の頭にて黒色に腫起たる所を抓破りて血を出すべし黒血出バ生地黄 薬店にあり 一味多少に拘ず濃煎じて服すべし何にても鳥の羽の翮の端を削りて尖なる処にて刺破

る最よし○又方紫蘇葉生にても干したるにても細に嚼て白湯にて嚥こむこと數度すべし

真頭痛

病状 頭痛甚く脳盡く沈痛或ハ連齒痛つよく手足厥冷爪甲れ色青く若其冷手ハ肘より上までのぼり足ハ膝の上まで冷のぼる者ハ理しがたし然ども理法あり可施

理法 速に百會（図説中風の條にあり）穴に灸すること數十壮且大劑の参附湯（人参附子等分なり）煎じ猛服して死を免る者あり

心腹卒痛は俗にいふむねのいたみなり○心腹の痛一様ならず其大抵を左に記して各これが治を志るしむ寒熱蟲瘀痰食六つに分ち載たり

蟲痛　心腹痛時作り時止痛止るときは飲食を能食し痛発るときは口中に冷唾たまり或は清水を吐き或は涎沫を吐て面青黄或は白して口唇紅は蟲痛なり

療法　烏梅 薬店にあり 多少に拘ず煎汁を服すべし○又方蜀椒 朝倉山椒 を炒て酒に浸し其用ゆべし

酒を飲てよし○又方艾葉生なる者を搗く汁を服すべし生なくバ乾るを水に煎し服すべし○又方使君子 薬店にあり 皮を去り肉の仁をとり四つ五つ食てよし又榧子を食もよし○又方五靈脂と檳榔子二味共に薬店にあり 等分末とし少し白湯にて送下○又方熊膽小豆大許温水に解服す

寒痛 綿々といつまでも断間なく痛ミ胸すきて飢ごとく按て快く大便泄瀉或ハ下重するハ寒痛なり俗に冷蟲と云

療法 木香 薬店にあり 末とし少し温水にて送り下すべし○又方艾葉生なるものハ搗く汁を絞服す乾たるものハ煎し服す○又方焼酒に塩少許を入服す○又方温酒に生姜の絞汁を入れ服すべし○又方干姜末とし白湯にて服すべし○又方胡椒十四五粒酒にて呑べし

○又方呉茱萸 薬店にあり 一味煎じ服す○又方
葱白ちと濃煎じ服す○又方肉桂 薬店にあり 一味
煎じ服す或ハ末にして白湯にて服ば此證最
灸して良中脘天樞氣海 三穴圖説見針灸まし 脘陽に出

熱痛 暴に痛暴に止て復作り痛む所へ手ば近く
ことを嫌或ハ面赤掌中熱く或ハ身に熱あり
或ハ大便鞕く或ハ不通或ハ瀉者あり瀉様ハ
先痛一陣ありて瀉こと又一陣大便臭きハ是

熱の痛なり

療法 黄連 薬店にあり 一味剉て水にて煎じ服す○
又方苦参 薬店にあり 剉煎じ酢を加へて服ば○
又方黄芩厚朴 二味共に薬店にあり と同く煎じて次
○又方山梔子炒焦して煎じ服す○又方蜂
蜜を多少に拘ハず喫てよし○又方芒消黄
連二味煎服す

瘀血痛 心痛湯水を飲て嚥下バ必吃逆をなれ

八瘀血といふハ腹痛一処にて他所へいつまでも移ず動かざるハ瘀血なり

療法 芍薬甘草 二味共に薬店にあり 此等分にして煎服せを○又方紅花 薬店にあり 俗に紅花なり を研く温酒にて服せ○又方五霊脂 薬店にあり 此酒或ハ酢にて服せ○又方桃仁 薬店にあり 二匁許煎じ服せ○又方桃花 干たるもの薬店にあり 水にて煎じ服せ次の痰痛用るもよし を用ゆべし

痰痛 心腹痛て腹の中漉々といへる聲ありて手脚寒く痛或ハ腰膝背脇抽掣て痛をなせハ痰飲にて痛なり

療法 礬石を酢にて煎じ服せ○又方五倍子 おはぐろぶしなり 圖説中毒にあり 炒焦して温酒にて服せ○又方蛤殼 圖説下にあり を煆て研末となし香附子も末を入同く和白湯にて服せ○又方白螺殼 圖説下にあり 此焼研末となし温酒にて服せ

食痛 飽食せし其當日或ハ翌日又二三日以後

に腹痛して先訫乾霍亂と同きハ食痛と知るべし療法大抵乾霍亂に同じされバ此に略せり

蒸法 以上五條の心腹疼痛何れも蒸藥をもてすべし惟熱痛のみハ忌むなり先法塩を炒熱して紙又ハ綿に裹ミ腹と臍下とを熨すべし ○又方葱白を剉く炒熱し紙或ハ綿に裹みて熨すべし

真心痛 手足冷あがりて青くなり心中痛強く背へ徹り堪難なり死に迫ると雖ども理法あり

療法 芭蕉 人家庭園に栽るものなり 葉を搗て汁を取り生酒に調和せて服すべし

蛤 和名はまぐり

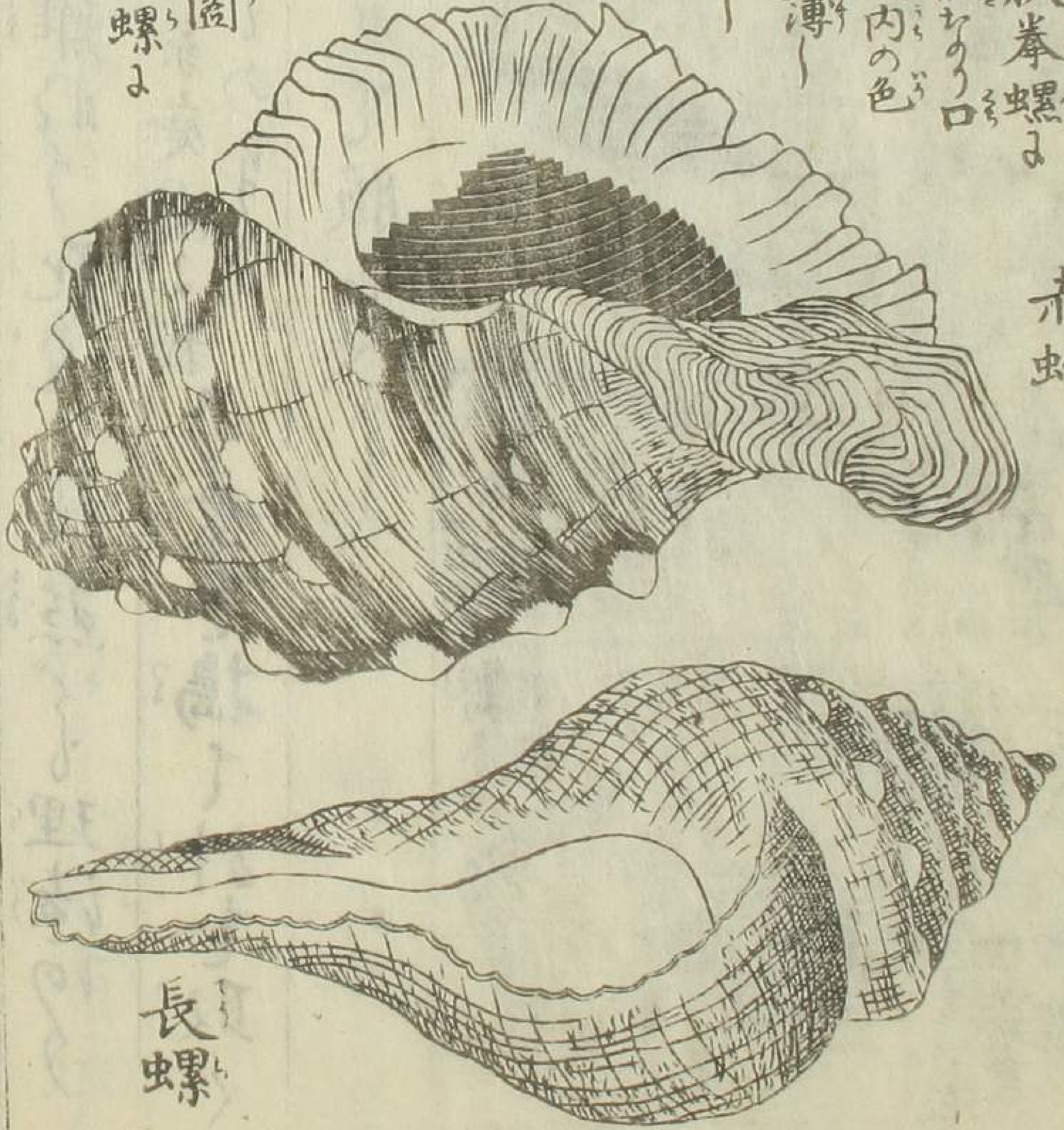
又江海處ふあり大なるあり小なるあり状圓の殻に紫赤の花斑雜色種々の紋あり其肉を煮て食し或ハ炙食又海濱沙上にある貝の雨露に晒され波濤にうちくだかれて碎たる者を拾あつめ焼用ゆ又よし生ある海蛤と云

白螺 田螺の殻の久しく雨露に曝されて白くなりたる物也田螺ハ和名たにし又田にし水田小川池瀆の中に生ず大さ大抵圓なり殻の状圓のごとし其色蒼黒なり三四月の頃腹内に子を抱一に三五子あり細小なり

海邊にては赤螺長螺用べし次に圖る

赤螺和名あかにし状拳螺に似て尖角なし紫黒なり口圓して一方の端尖肉の色赤し厴の色黒して薄し肉乃頭外黒く中白し尾も拳螺に似て蒼黒腸の味辛し四國西國邊に産する物ハ尖し角あり功用ハ同し

長螺和名ながにし赤螺に似て長く小なり口赤からず状圓ならし肉の味赤螺に優る



急黄

病状 人卒然に渾身黄色になり心腹満悶て氣急喘息する者ハ命頃刻の間に在り危殆病なり

療法 瓜蔕（菜店にあり真桑瓜の蔕なり末となし／越前より出る味苦もよし）鼻中へ搐入く黄水出るをよしとす或ハ丁子（菜店に／あり）少許を加 ○又方煖醋にて瓜蔕末四五分ほど服すべし即吐却すべし吐するをよし

されども吐ざるハ沙糖一塊を含嚥込べし
若又吐く止まざるハ麝香を湯にて少々飲む
べし　此方を用て吐やまざるハ後の中毒乃候とみへたり　○又方蔓菁子
野菜の品なり　を擣て汁を取り水に和て喫べし
○又方苦瓠　状夕顔のごとく長くして本細く末大味苦きものなり　一枚孔を開
水にて煮て汁を鼻の中へ滴入れ鼻より黄
水出てよし　○又方雄雀屎　糞の頭尖るハ雄雀乃屎なり　湯
に化多く飲べし

卒瘂

病状　人俄に言語なく聲いでざるなり

療法　萊菔乃絞汁に生姜の絞汁を和徐々と
服すべし　○又方橘皮半夏　二味等分　水煎し服
○又方杏仁三分皮を去熬桂枝一分　二味等分なり
末にし和泥のごとくし無患子程を綿に裹み
口中に含み徐々嚥下べし　○又方生姜汁をの
むべし　又嚼食もよし

懸壅垂長 のんどのひこたれさがるなり

病状 凡人喉咽の前上腭より垂る肉あり俗にひこと云此ひこ暴に腫垂長なりて咽喉に妨悶をなすものあり是懸壅垂長と云なり懸壅とハひこのことなり

療法 鍼にて破るべからず大に害あり枯礬に塩少し許を入れ碾て末となし筋頭に紙にて巻薬にて蘸て腫処に塗べし ○又方芒消

薬店にあり濃くせんじぬるゆにのし○又方乾姜半夏薬店にあり二味末となし舌に着て嚥くよし

指頭卒痛

此證軽と重きとの二つあり大抵内に蘊毒ありて痛外に發するなれバ速に理を宜きにあらざれ惟一時乃痛を凌て害なく急卒の苦を緩むる薬一二味を載るなり

病状 卒に指痛忍がたくバ丈夫といへども叫喚するに至るべし

療法 木粘鳥を捕に用るもちなりを痛所へ貼てよし○又方活鯽魚を搗爛て泥のごとくして痛処に貼てよし○又方芒硝薬店にあり五六分白梅肉にまぜ

痛所に塗べし○又方上々のひき茶をなめし糊にてまぜてぬりてよし○右の方にて痛ミとゞまらざるハ活雀を捕て腿の付際より小刀を以て断ち切口より痛処の指を腸の中へ挿入てよし雀死して冷バ換て痛定を待て停べし鴿を用もよし

如是截断て切口へ指をさし入べし

無名腫毒

何とも心得ざるごとく名も知ざる腫物を生ずることあり早く傳薬等せざれバ恐くハ害あれまてに甚しきにおよばん

療法　紫葛（後に図あり）根皮を擣く醋に和て封べし或ハ根を搗糯米の粉と等分にして温湯にて調和患處に貼置し其腫に熱氣あらバ用ゆべからず○又方三七（前に吐血の條に図説あり）磨醋

に調て塗べし○又方商陸やまごばうかう前の急喉痺に図あり
鹽少許入て搗和て傳べし○又方蔓菁根かぶら菜なりの根を搗て塩少許を入和て封べし○又方金銀
花忍冬の花なり前巻脚氣の條に図あり莖葉ともに擣て汁を絞
取て温服すべし其渣を患處に傳べし

紫葛 和名 この祢ぶ
蔓草なり山野に
あり春生し夏花を
ひらき秋子を結び冬枯
莖紫色を帯く堅葡萄に似たり

卒聾

病状 人平居無事にして卒然と耳きこえざるなり

療法 香附子 薬店にあり 毛なく炒研て末となし薬服子の煎湯にて服すべし ○又方蚯蚓塩を入搗る葱の内に置バ化て水となる取て耳の中に滴入べし ○又方全蝎 薬店にあり 塩づけなり 塩を出し用ゆ 末となし酒に調て耳の内へ滴入べし耳の内さわく鳴て愈るなり

耳中卒痛

病状 膿汁ハ不出耳中俄に惟痛甚しき症あり

療法 椀架下汚水を一滴計耳中に灌入てよし

○又方椎茸（食料の物なり）を湯にひたしよく〳〵とこ出し其汁を少し耳の内へ入てよし

○又方唐大黄辰砂（二味共に薬店にあり）二味等分末にして湯にてうすくとき少し耳の内へ入れて治す

○又方熊膽（上巻積氣暈倒條に説あり）一分許龍

脳（薬店にあり）少許涼水によく化し其水を耳の内
へ滴入ること二三度すべし痛止し後頭を傾て
出すべし○又方萊服の葉を搗て汁を取り
耳中へ入べし

舌卒腫大

病状 人舌卒に腫大になりて口中に満者あり

療法 雄鶏の冠を刺し血を取撚紙に浸萆
麻子（薬店にあり 急喉痺にあり図説）の油に蘸燃薫べし○又
方生蒲黄（薬店にもあり 金創の條下にあり図説）を塗べし少許乾
姜の末を加へ最よし○又方硼砂（薬店にあり）細末
にして切る生薑につけ舌を徐と揩べし○
又方釜底煤（なべ墨）に塩少許ませ舌に傅べし

脱去ときハ又傳べし○又方龍脳（薬店にあり）末をしそ傳く妙なり

小便急閉

病状　小便俄に閉て通せず小腹堅満悶乱者あり

療法　白菊根搗汁を生酒に冲く和温服す○又方急に諸魚の頭に在る石を取り末となし一二分白湯にて送下すべし（諸魚の中いしもち最もよし）○又方蝸牛（圖説前の條下に詳なり）を搗爛紙にの臍下に貼り手にて其上を徐々摩すべし（田螺よし）を用もよし○又方象牙煎用ゆ○小腹脹急甚

のさきハ萞麻子図説急喉痺の條にあり三粒殻を去研細にし紙撚に右の末を塗て数々と陰茎の孔の内へ入べし三四寸程も入べく又そろ〳〵と出すべし○又方琥珀油なあり薬店にあり阿蘭陀渡りの物也紙撚に付入る最よし○又方皂莢図説中風の條にあり鼻に入嚔を出して良○又方小便不通死せんとするハ蚯蚓をよく研冷水中に入滓を濾去て其水を半碗飲べし立ところに通○又方髪灰頭の毛乃黒焼也冷水にて飲べし

石首魚

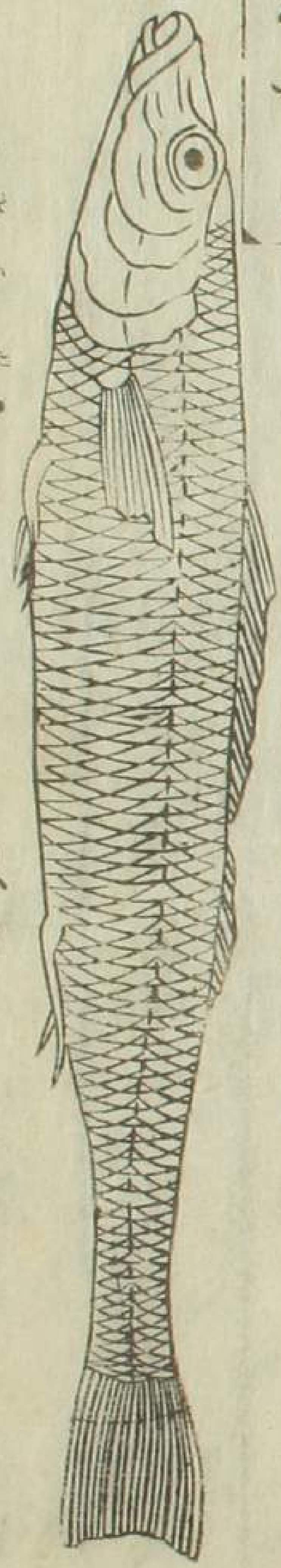
和名石持又ぐちとも呼西國にてハぐちといふ海魚也小なるハ五六寸大なるハ四五尺許ある者あり頭中に石あり二ッあり

此石を用べし魚の形図のごとし

色ハ淡黄白きなり鮮しきハ青く光るなり少し微紅なる所あり

此魚に似たる一種鮸と呼者あり頭中に石なし

鱚きす



又きすと云海ぎすも河ぎすも此二品あり状大抵同じいづれも首に石あり取用ゆべし

此外棘鬣等魚皆頭中に石あり代用ゆべし

脱頷 あごのはづれあり 一

病状 人口を大に開て笑或ハ欠をしそこなひく頷のかけが外れてしまひて口も合もこなひぬくつげるものなり

療法 其人に酒を酔ほどに飲せ睡る中に皂莢にあり圖説中風の末を鼻孔の中へ吹入嚏をさせしく自然に復る○患人の体を柱に倚かゝらせ頭をおしつけて動かぬ様にして身を

平にして安坐せしめ外の人正面に向ひ両の手の大指を口の内へ入れ槽牙の上端を捺下頦を托住て一先手前の方へ引下却て急に持挙向の方へ一拍子に送上くはし込て闗竅の處へ投べし扨其以後に絹木綿の類にて頦と顚とへ兜置こと半時許にしてよし一拍子にかきがねのもとへ入て其口の内へ入れたる大指をすみやかに引出すべし其引やう

の拍子少しにてもちがひめくればかきがねのはまるとき指をくひ切る禍をかふむる事あり工者ならではなしがたし凡脱頷肩骨脱臼の類速に療理せざれバ復しかぬる者なりすみやかに瘍醫を迎べし

右の法古人の載る所にして最良方也然ども是ハ術になれざれバ手に覺束なし

漫に施し却てはゞかりあることをなさんより醫者を迎て理せしむるに如ハなかるべし

○一度脱頷をわずらへバ其後大に笑又ハ欠すると紀幾度も脱ることあり面を側の方へ向てあくび或ハ欠をせねバ脱ることなし心會れ茲に紀す

卒然牙關緊急

病状 人外ハ無病にして惟卒に口をひらく事ならざるあり

療法 鹽梅一二箇核を取去肉を取り牙歯に擦塗て口開べし若開て閉ざるハ再塩梅を牙に擦て口の開合の様子を候て塗ることを停むべし

脱疘不救　だつこう出て入ざるなり

療法　脱疘ハおさまらざるハ生なる柿の葉又ハ青木（青木ハ燎傷の所に図を出せり）乃葉などを火にあぶり炙あたゝめにして脱肛へおしあてゝ徐々と按入べし

○又方　蛤（蛤ハ心腹痛乃條に図説あり）一二升水をいれずにむして殻をさり蛤の肉ばかりを絹きれにつゝみしあつきほどなるをおしあてゝそろくとおし入るべし包たるきれより汁なと多く出る

やうにすべし○又方青海苔（色青く細き海苔也 伊勢のりといふものなり）それをあつきほどの湯に入れやき塩を一撮ほど加入れバいよいよよし○又方阿煎薬（薬店にあり）唐を用ゆべし（和名 さるぼうといふものなり）蚕に和し塗べし○又方五倍子（薬店にあり 洗中毒にいり）明礬等分湯にて煎じ洗絹切又ハ芭蕉の葉又ハ荷乃葉にてそろそろ托入べし

長蟲下出

病状 人偶肛門より長き虫出る事あり其長七八尺より丈餘に及び半日一日ぬくも其終にあり強く牽出せバ斷て出ず全く出るよしとぞ（虫の形扁して節あり真田紐乃ごとくなり色白し）

療法 出る所乃虫の端を筋様の物に巻纏て熱き湯を器物に盛をき其中へ浸せバ虫自に出尽るなり

外傷之類　怪我并ニ畜獣ニ咬るゝ等外より傷るゝものをこゝに載

金瘡　刀脇差等の類惣て刄物ニて怪我せしをいふ

凡刀傷ニハ水を與へ飲しむべからず且風ニ吹るゝ事を忌若此禁を犯せバ大害あり

凡金創血多く出るを忌速ニ燈心草ニ（毎夜燈火ニ用ゆる）所のものを其疵口の大小程にきざみて押付其上を木綿にても絹布にても巻く置べし血自止如是して醫れ來るを待べし

○又前方にて血止まざるハ葱の白根并葉共
に搗爛て紙に包熱灰の中へ埋置熱なりたる
を取出し傷処へ敷べし若冷バ幾度も換敷
愈し○又方熱小便にて刀口を洗べし洗に
ハ燈心草を瓶の大小に従て或ハ一握或ハ二握
許を線にて紮端をそろへ斷小便を浸て
洗へし血自止○右の方にても止ざるハ先
何にても銅鐵物を焼て刀口の血の出る処へ

ちよつと當て急に去べし血自止凡刀口處の
肉中小血れ出る口あり其沸出る口を能看定
て當ざれバ血止ず銅鐵物火中に内赤くなる
ほど焼て直に用ゆべし○右の諸物無き時ハ
人の糞を傷處に封てよし血自止○手足の内
にて搶きづにても斫疵にても一處血走絲れ細
ちよ出て何如様にしても止ず遂に死に至る
ありこれを止むるにハ凡人の股乃付根陰毛の際

と腕の下に真中に動脈あり自試て知るべし
手に疵あらバ何處にても腕乃下の動脈を
上へ掛物の軸様に木を削りて右に木を押當
強く捩付て上より木綿切にても絹布切にて
と緊く肩へ掛幾重も纏付く脈乃通の留る程
強く結べし暫くして血自止なり又脚ハ腿乃
付根の動脈に上を右の通りにすべし止まて血
に止ざるハなし

血止たる後 生の鶏卵を破く清黄ともに和匀
あハせ布を漬く其布を傷處に當置其上
を木綿にくゝりて抹て瘍醫の來を待べし
或ハ鶏卵の清を疵口へぬるもよし血止りたる
後醫來るとも遅又ハ疵口至て大なるハ活鶏を
剖き熱き皮肉を取急に刀口に扯下置べし
冷バ幾度も換て冷ざる様にすべし凡金瘡
刀口大に開たるハ皆此法を用て醫の來を

待べし

腹を斫て腸出たるハ急に新汲水を口に含て其人の面に噴て其身を噤慄せしむべし腸自入る若一两度噴く收らざるハ幾度も噴毎し腸收を見く止べし

金瘡身戰暈絕人事を知ざるハ熱き小便を灌のませてよし童子の小便最よし○又方馬糞の汁を絞り熱湯に和し用ゆべし獨參湯に和し用も最よし

喉を刎る人ハ先其人を仰臥しく枕を高し頭面まへかうにして刀口開かざる樣になべし扨風を避衣被を蓋く煖かなるべし若呼吸に別条なきハ白米一合人參一錢生姜三片入く粥を焚き粥の清を啜く元氣を接補て醫の來を竢べし

刀割斧斫夾剪鎗箭一切諸傷癥小なるハ生半

夏（薬店にあり）を研末となし帯血傷処に敷てよし
血自止○蘿摩實内綿（後に図あり）採て貼べし血汐
止るなり○又方烏賊魚骨（図説後にあり）研末となし傷
処に摻てよし○又方龍骨（薬店にあり脣に付て吸付との紙用ゆ）
べし末となし傳べし○又方石灰はち末傳く
よし○又方唐大黄（薬店にあり）炒黒し細末となし
傷処に摻てよし○又方雲母引とる扇子（萬歳扇と）
（江戸人云ものよし）焼灰となして傳べし○又方麒麟血（薬肆）

にあり細末となし摻てよし○又方蒲黄（薬肆にあり図）
説（出ル）後に傳てよし○又方青蒿（図説後の咬にあり）蟲生に
て操傳てよし血汐止○紫蘇の葉生ながら操
傳くよし

鳥銃子人の肉の中へ打込たるハ

滚酒の中へ蜂
蜜を沖て多飲べし○又方天南星（薬店にあり）末と
なし甘草煎汁に和傳べし○又方食蓼穂研
末なして苦参黄栢二味（薬店にあり）の末を和頻貼てよし

蒲黄

和名 がま すゞば

蒲ハ水澤の中に生ず葉ハ莞に似て扁し背面ありて柔かなり状図のごとし夏茎を生じ穂をなす茶褐色にして状蠟燭のごとし此に付る黄色なる粉あり即此草の花なり是採用る是蒲黄なり

茎葉共に三四尺に至る實の長さ五六寸なり

烏賊魚

和名いか

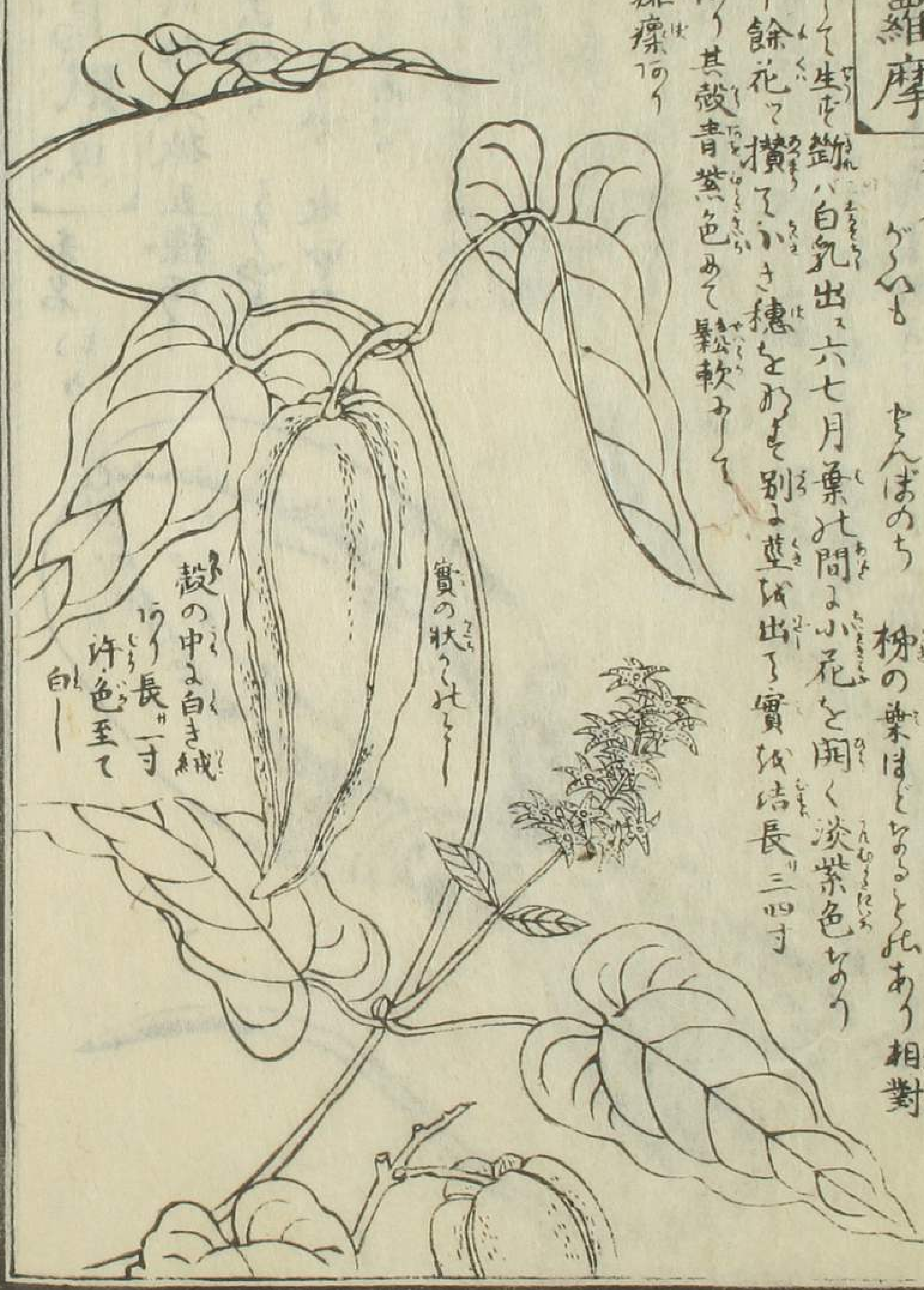
此物大抵五種あり
甲いか　まいか
あをりいか　水いかの
するめいか

右の内するめいかハ五島いかと云皆乾て蓄とおくなり此に用ゆる所ハ骨なり骨ハ甲いかを江戸にてハまいかと云針いかハ頭上に鍼あり故名づく此二品共に骨あり用べし其餘の三種骨甚薄柔軟にして薬に入ず

蘿摩

和名 がゝいも 香とう艸 きんぼのち

蔓草なり薬圃にてもし大なるハ柳の葉ほどなるものあり相對して生ず断バ白乳出ゝ六七月葉の間に小花を開く淡紫色なり十餘花にて攅てひとつき穂をなす別に茎を出て實を結長サ三四寸ばかり其殻青黄色にて鬆軟にして疣瘰あり



舌断

まゝ舌をきりしるもの

大人小兒偶小刀を合誤て舌頭を割斷已垂落たりとも いまだ斷きらざるハ急に雞子の白皮を取舌頭を袋て亂髪を燈火のうへにて焼灰となし細研て末となし蜂蜜（薬店にあり）に和て舌根に塗べし如斯して大抵三日許にして断口接もちなり

跌仆きて舌を穿斷く血出ぐ或ハ不覺自咬

傷て血不止ハ倶ニ鵝翎を米醋ニ醮し頻ニ傷処を刷べし血自止仍蒲黄なり前ニ見えを蜜ニ和て喩化てよし

擦壊

跌傷或ハ手足或ハ面の皮肉を擦壊るハ青木後ニ図ありの葉を醋ニて煮数沸し麻油少許を滴入て其葉を取出し傷処ニ貼べし○又方皮膠薬店ニありを水ニ煮て熔化し傷処ニ塗る最妙なり婦人嫁痛ニ最よし

女子誤て陰門を擦て痛バ急ニ烏賊骨図説前ニありを研細にして鶏子黄にて泥塗てよし

青木

人家園庭に多植其葉大なり樹色青高四五尺一丈に満ず枝多く生じ實の大さ棗のごとく冬熟して紅なりひよ鳥好て食

攧撲墮落壓倒閃挫落馬

凢壓打て氣絶したるハ其人をして僧の坐禪をするが如くに坐らしめ一人ハ其頭髪を將て控張て半夏薬店にありの末を鼻孔の中に吹入るべし猪牙皂莢圖説中風にありの末或ハ胡椒の末を吹入も亦よし嚔をして活却ならバ生姜の絞汁に香油を拌匀て灌べし〇又方墮壓まて氣絶せバ其人を仰臥せ置此方の兩の手掌を以て患人の

両の耳の孔をちからを極く同時にちよこと打
ち手を直に腕と押付て放たび置ながら徐と
手を動かし其人眼を開を待く手を放すべ
し其後湯薬を與へ飲ましむべし左の圖あて

救打撲而昏冒人圖

如此に病人の両の耳を両の手にてしかと打て其手をそのまゝおしつけ置ながら向の方と手前の方へ其手をそろ／＼とうごかすべし病人正氣になりたるを見て手をはなすべし

〇又法死人を仰に臥しめ救人其上に跨立て
左右の手にて腹を上より下の方へ志かと数遍
摩其上にて左右の掌を死人の臍の下に當温
と息をつめながら一息に上の方へ強く推上べ
し必眼を開なり其時引起項後を強く捺て
後脊骨の左右を強く下の方へ按摩すると数遍
みして聲を揚て呼ながら掌にて二川程脊
の七八椎の邊を強打べし必蘇るなり左に圖せり

又救打撲昏冒圖

臍の下ハ氣海の邊なり氣海ハ穴ハ前の陽脱の條に圖説あり

服藥 墮撲て乍氣絶せるハ右の法を施し活却して後熱小便を多く飲べし瘀血小便より下るなり或ハ飴糖を熱て温酒に和のませてよし

又よく瘀血を小便より下すなり

諸閃肭閃腰打傷并手足損傷 血出ずして痛惟其處の色或ハ青或ハ紫なるハ先葱の白根を剉細にして炒熱くして痛處を擦熨あたゝめて急に大黄の末或ハ生姜の絞汁に調へて敷て其人の酒量に隨醉ほど好酒を飲しむべし ○又方 朔藋又ハ接骨木 二品ともに後に圖あり 何きみても水に煎じ二三椀をのミ且痛処を薰洗てよし ○又方

驄馬の糞 驄馬ハ地皮黒くして毛白し 月毛とまゝのふきのなり を温湯に
和て痛所を浸し洗ひし○又方蘩縷 図説下にあり
茎葉ともに搗く染家糊に和て痛所にぬるべし
○又方楊梅皮 薬店にあり図説中毒にあり 末とし紺屋糊
に和しまぜ痛処に塗てよし○又方水仙の
根 人家に栽又ハ生花にする冬花開く草なり 擂て痛所に塗べし又
なんじ服するもよし○又方老茄子 大核のなすび 黄
色に大なるものを薄く切尾盆にて焙細末

にして二匁許づゝ酒にて服す○又方大豆を
末にして酒にてねり貼てよし
血出び傷所紫色 なるハ瘀血心を衝き煩悶む
こともあり先童子小便を灌與へ飲しめ豆腐を
煮熱のうち患処を熨て冷バ換べし紫色
漸にさめて淡紅に變をよしとス
筋骨折傷痛甚 ハ急に雄鶏一隻を捕刀をもつて刺
て血を取酒に和し飲痛立所に止

蘩縷

和名　はこべ　あさしらけ・びんづる　ひづる
亀づり　ひづり　へんげる

此草所々濕地に多し正月苗を生じ地に布て蘩衍とはびこるなり此草に似るものあり此草ハ茎葉ともに青く茎を断バ空なく中に小縷あり

三月以後白花を開形圓ちいさし實を結ぶ

又此草に似て微く赤色を帯て茎を断バ縷なく味苦きものハ唐なく鶏腸といふ別物なり此二種ともに和名はこべといふ名に依て誤る可からず

接骨木

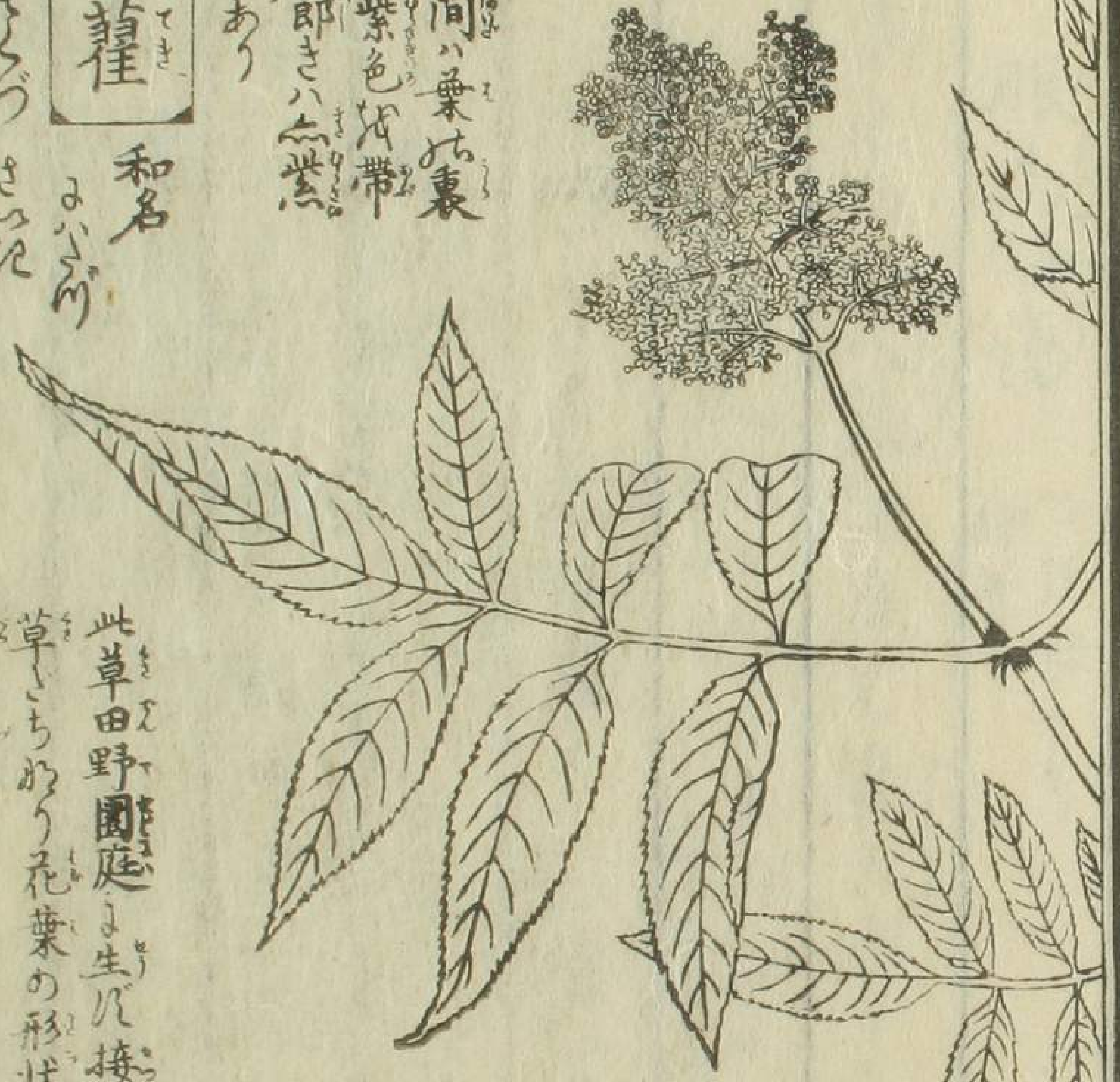
此木田野人家庭園に生ず高サ五六尺より一丈許りに至る春葉茂生じ花を開く色黒紫あるひハ至て細かなり又白き花のものもあり花落てのちさがりて實を結ぶ

和名 にハとこ こもうりぎ おたづ きくおれ木

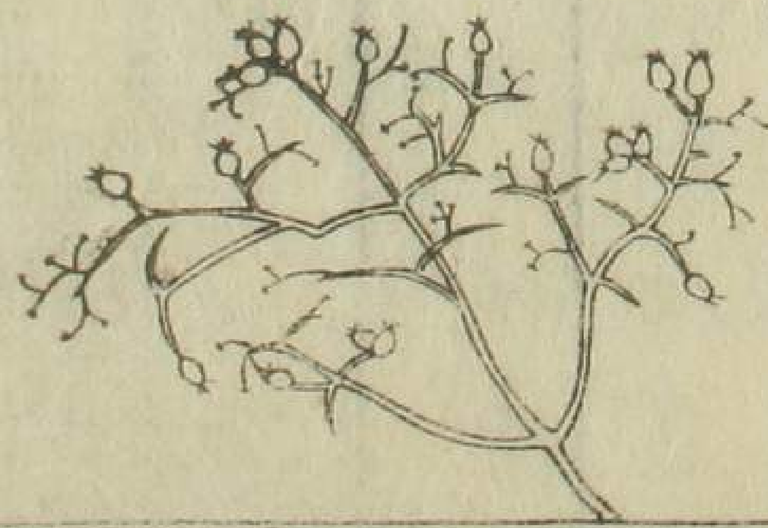
蒴藋

春の間ハ葉の裏少し紫色を帯枝の節さハ紫の斑あり

和名 よかづり そくづ さへち はちひとさ



此草田野園庭に生ズ接骨木にして草なり花葉の形状同じしかれバ別に圖せず



實の形状

眼為物傷（つき目うち目なり）

軽きものハ人乳を多く滴入べし沙糖水もよし○又方水仙の根（人家園庭に栽又ハ生花に用ゆるものゝ根なり）研く沙糖にまぜ合點べし○睛を傷るものハ蠅の頭（蠅ハ人の家内にあつまる虫なり）を取よく研爛沙糖又ハ人の乳に調く數度目に點べし○又方鹿茸（鹿の袋角なり薬店にあり新を用ゆべし）至極細末にし人の乳に調度ゝ目の内に滴入べし重傷といへども

救急方巻中

愈るなり

目睛突出　めだまとびいづるなり

人極て重き物を努力ハずして提挈又ハ他人にはげしく敺まれ一眼或ハ雙眼ともに突出ることあり急に手巾様の物を水又ハ酒にひたして濕し（若うるほさざれバ眼睛粘着てまぶたぬその物をばなすり）其眼睛を盛旋轉目系の乱ぬ様よして（眼睛附て糸筋あり目系といふ此系れ）入乱まさらぬ様によく（なをりして入置きをいふ）納入る遍し扨猶又濕巾かくしを上を裏住く三日れ間開べからず

此若し早く裹るゝ巾を解バ眼ハ旧の如く成てしも風寒に遇バ常に痛を發てある者なり

○又方急に手掌に唾を多く吐込手にて眼睛をとうけそ摺くとおし込こて拭揉の物にて包置こと三日にして解へし強く鼻を擤て目睛飛出るてはり心得あるべきなり

○又方生の地黄を搗く綿に裹目睛のうへにつけ萬能膏を紙にのべ其上に張つけ置べし

湯盪火焼 湯火にて焼どせるなり

湯火傷生の胡麻を杵細にして厚く封くよし

○又方稲稿を焼灰となし湯の中に入ま湯冷るを待く急に痛処を漬まべし疼痛頓て止なり或ハ冷灰を水に調塗くよし○又方蜂蜜を傷所に塗てよし○又方冷飯を其侭封てよし○又方淳酒の内へ傷を浸べし傷處大なるハ布綿衣物乃類を酒の中に浸し傷處

に當其衣物あつくかまなる時ハ幾度も浸
しかへて當べし酒ハ三年以上の濃きを用ひ
てよし○又軽きものハ水に蜜を入和服して
よし○又方少し古湯火傷ハ炭火上にこのぎしく
痛を忍ぶる暫時まつべし早く愈るなり○又
方蛇莓草に図説下にあり搗爛て塗てよし○又方蜜
柑の汁を絞塗てよし○又方側栢葉に図説吐血にあり
搗爛傳くべし○又方鶏卵の志ろミぬりてよし

○又方伏龍肝竈の下の土なり古き焼土を水に和し傳べし○又
方石決明鮑の字を用るなりへ水を入まぜて小刀にて
數遍かきまはして其水を痛所へぬりつけ
る石決明ハあはびのからにて年をへたる
ハなほよし鮑の肉ハ不用其貝がらへ水を入るなり
此方甚よろし○遍身焼灼したるハ急に
萊菔の絞汁或ハ童子小便を服しめて後好酒
を甕にても桶にても多く盛置其中へ病人

を裸體にして浸入しよれば重きとても死に至る○凡湯火傷童便を飲べし火毒内攻せば大人の小便も童便なきときは用てよし

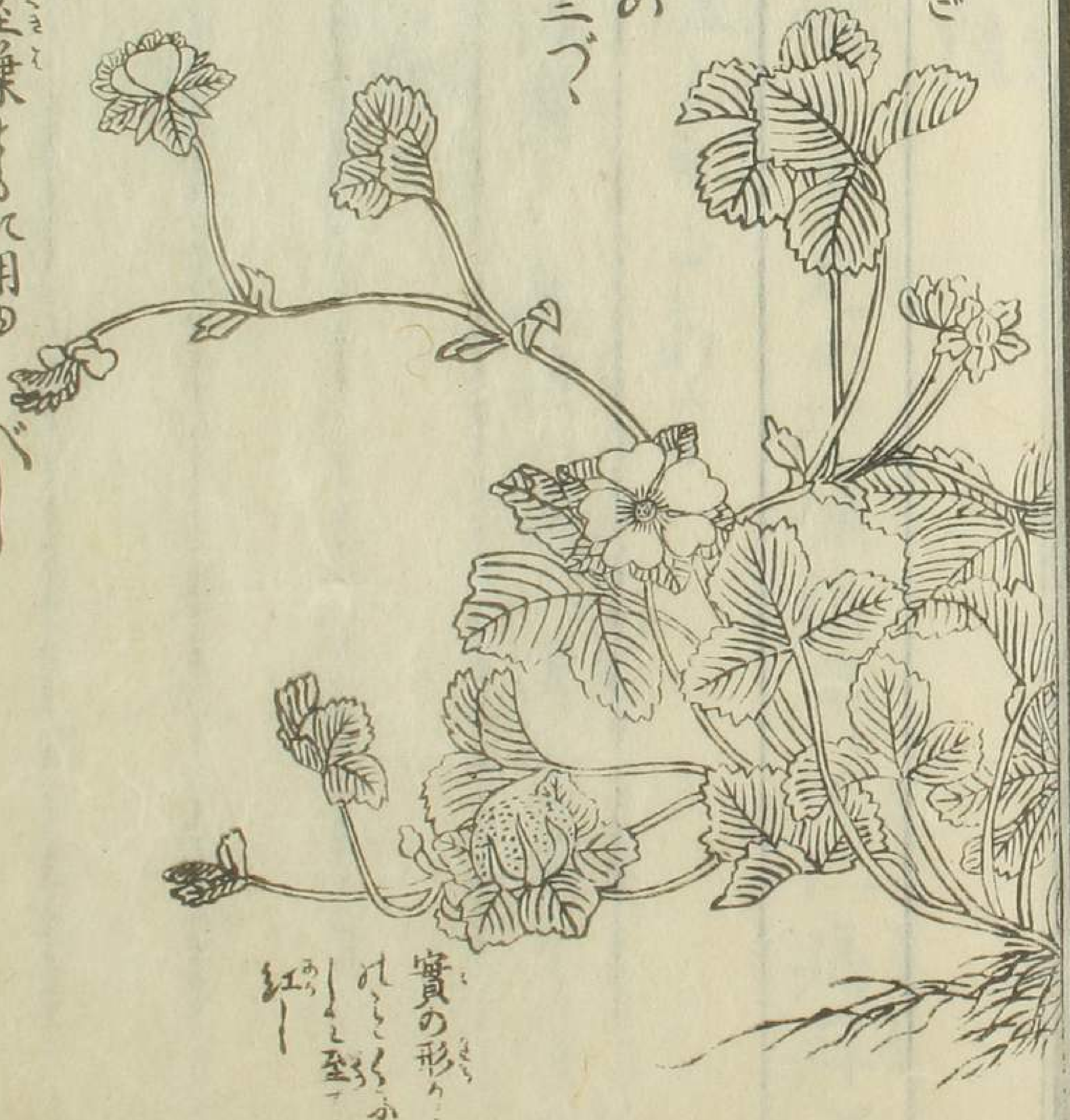
○失火にて圍焼せるひとは糞缸へ人誤り踏こみ至りどせしは生菘を擣多く汁を取傷の所に塗て良○又方山蘋を擦塗てよし

凡湯火傷冷水を淋べからず一旦は痛止に似れども火毒内攻して大に害あり

蛇苺　和名 へびいちご

みなもいちご
かうれのやまもも

此草地に付て細き蔓を引節の下に小根を生ず葉三づゝ出るものあり又五ツ七ツ出るもあれあり四五月の比黄花をひらく五瓣形圓にてなり實の形圓のごとくにして紅し茎葉ともに用ゆべし



凍指欲墮

人霜雪を侵し手足の指凍痛或ハ不仁痛痒をしらじ已墮とするあり

療法 馬糞を煮て其汁の中へ指を漬ること半日許にして愈

人咬傷

人の為に咬て疼痛をなすハ亀の甲を焼く灰となし香油に匂て付てよし亀の代に鼈甲もよし○又方鶏の溏屎を咬るる処へ塗るし○又方熱人屎にてよくよく傷処を洗ひ其跡よく生栗子を嚼て咬処に敷貼てよし痛強きハ麻油を紙撚に塗て火を點し焔ふく薫てよし又ハ人の乾糞を胡桃殻を割く半片につめて

咬処に覆置て殻れ上より艾ゆく灸すべし痛ざるに至て止○痛強ハ童便に洗て前藥を用

凡人に咬るゝも亦大に害なきものなり

病人ハ殊に害甚し若咬傷されバ速に薬理すべし

諸蟲咬傷

蛇虫人を纏るを附す

蜈蚣咬傷

雞蛋を塗てよし黄白共に用也○又方食蓼葉を揉く汁を咬處に塗てよし○又方毒甚しく痛腫ものハ人の糞を咬傷る所へ塗置し○又方蛞蝓（図説後にあり）を取く傷處に貼てよし 蝸牛（図説疔の條にあり）を取く汁を咬處に滴入るゝも亦よし○又方大蒜を嚼て傷處に塗 小蒜（図下巻諸物入年に出）亦可○又方塩を傷處に傅て愈○

又方蜘蛛を取て咬処に置ときハ蜘蛛自其毒を吮て痛立止

螻蛄咬人 石灰を醋にてときて封べし

蜘蛛咬傷 人の小便を傳てよし○又方油淀を塗べし○又方鹽と油と攪和て敷べし○又方炮生姜を貼てよし○又方蘿摩（図説金瘡挼にあり）て汁を咬る処に附べし

蚝蟲刺人 伏龍肝（竈の下の焼土なり）を水にてときて貼く

よし○赤なりて痛にハ馬齒莧（図説後にあり）をよく搗て封べし

蜂蠆螫傷 蒼耳（図説疔毒にあり）を揉て貼べし○又方食蓼の葉を採て傷処に貼てよし○又方生芋を擦て封てよし芋梗も用べし○又方齒垽（人の齒のあかなり）螫たる所に塗てよし○又方蠟燭の蝋を咬る處に附てよし○又方傷處を熱き湯に浸べし冷バ數度取かへ浸べし○又

方生蜀椒を嚼て螫るる處に封て妙なり生なきときハ乾たるもよし若實なきときハ葉にても用ゆ○又方青蒿(下に図説あり)の葉を挼て螫たる處に貼べし○又方塩を嚼て封べし○又方薄荷(図説下巻小児撮口に出ス)葉挼て封べし○又方釅醋を地上に沃ぐ其泥をぬりてよし

蝮蛇囓傷

急に柳漆(渋柳)を搗く汁を取ぬるを塗べし若無きときハ乾柳(柳沛柳枝)の類の肉剉醋に煮て塗べし(或ハ柳乃)

(蔕を末となしてぬり糊に和し塗もよし)○又方千屈菜(図説獣咬にあり)桔梗葉(図説下にあり)右二品共等分擂爛胡椒(薬店にあり)七末一撮入て傅くよし○又方急に烟管乃鴈頭(小き竹の截口にてもよし)なとうつむけに傷處へ掩覆力極搭定く放さゞれバ肉腫起て鴈頭の内一杯になるとのなり其処を小刀にて斷割て悪血を多紋出すべし又ハ急に鳥銃の火薬を囓たる處の大さ程に盛置て火を點て火を發

るべし右の方便宜に任せ用ゆる後に人の熱き小便をもつけて瘡口をも洗ふあと人屎を傳くうへを布木綿にて巻き家に至りて酒にて人屎を洗ひをとし左の方を用へし○爐中或ハ竈の中の灰塊を熱湯の内に入れ和匀再火の上にのせ三四度沸其湯の内へ傷れる處を漬れべし初ハ熱きを覺ざるべし漸に熱きを覺へバ最早毒淺くなりたる也何れにも堪かぬるに至て止べし次に雄黄五靈脂二味（共に薬店にあり）をも末となし馬齒莧（圖説下にあり）の絞汁にてとれ瘡口の處をも除て四圍に塗く上を裏置べし○服薬ハ五靈脂雄黄等分末となし温湯又ハ酒にて服すべし總て何れの薬を用ひるにも後にて酒を酔ほど飲べし凡山野をも経歴する人ハ右の薬を購て帯行べし若右の二薬なくハ馬齒莧をも茎葉共に搗て絞汁をも三盃ほど飲べし亦妙也

蛇咬

常の蛇に咬たるハ鹽を嚼て傷處に敷其上へ艾にて灸を廿一壯すべし訖て復鹽を嚼傷たる処へ塗べし若山野にて塩も艾も無ときハ火縄の火にても烟草の火にても傷の處へ押付て熱きを堪べし○又方明礬（薬店にあり生を用ゆべし）火にて溶咬たる處に流しかけ置し熱きを忍べバ立所に愈○又烟管を火の上にて炙バ脂湧流るゝものあり其脂の流を直に傷處へ滴掛置し其熱きを忍て多灌のくべし此方蝮蛇咬にも用てよし

○又方蘿摩（図説金瘡にあり）搗て汁を取咬処に傅くよし○又方蒲公英（図説疔の條下にあり）搗て傷處に貼置し○又方杠板歸（図説後にあり）藤葉ともに搗汁をとり酒にて服し滓を傷所に搭て良○又方蒜を食して酒を飲且蒜を杵爛て患処に塗て其上へ灸すべし○又方金絲荷葉草（図説下にあり）搗て汁を取り咬るる處に附べし○又方小便にて

よしく血を洗ひ其あとへ齒垽を塗てよし○咬まるあと瘡となりたるハ熱酒にて頻洗べし
凡蛇に咬まる人水にて手足を洗或ハ川を渡るべからず一切酢物を食べからず若是を犯せば瘥ても復発る

蛇纏人身不解 ハ身をいたく側に臥左右へ滚げ轉バ解るなり○又衆人一同に尿をしかくれバ釋るなり熱湯を淋かくるもよし

蠼螋に咬たるハ烏鶏の翎を焼て灰となし鶏子清に和して敷てよし

蚊豹脚嗜 蚊ハ夜出て人を嚙 脚ハ晝出脚班なり 豺にハ刀豆人家園圃に栽く食料となすものなりの葉を揉て其處に貼べし又樟腦焰消二味ともに火薬店にありを香油に和し傷所に塗べし又熱湯に漬置し痛痒卽止

蟆子に嗜 るハ蚊より毒つよし療法大抵蚊と同じ痛痒止ざるハ海蝦を鮓となし食て瘡

を發して愈

蚋に螫 蚊に似たる蟲なり まれて痛痒忍がたきハ手にて搔バ皮肉破てあしゝ塩を上に布て物に包ミ置愈し即愈又螫るゝ時直に熱湯に洗バ立愈龍脳樟脳二味共に薬肆にあり 能此毒を解何にもよろしく此物乃入たる煉薬類又ハ目薬様の物を塗てよし

蛭に吮るゝ に塩を擦べし又田澤を渉る人ハ勿論山中にも梅雨の頃抔蛭樹上より落て人を吮ときハ油に塩を和し手足頸に塗置し

蛭嚙も

蟲咬 何の虫と云を志らざれ 腫痛ハ姜汁にて其處を洗後に明礬雄黄 何れも薬店にあり の末を貼てよし○又方青黛雄黄に 二味薬店にあり 此末水に調塗てよし又藍艾の葉を搗て汁を取塗てよし○又方ルウタ草 図説下にあり の葉を揉く封べし最よし○又方款冬此葉 菜とめし食する者なり 揉て傳べし○又方蛇蛻皮 くちなハのきぬ に野邊に多し

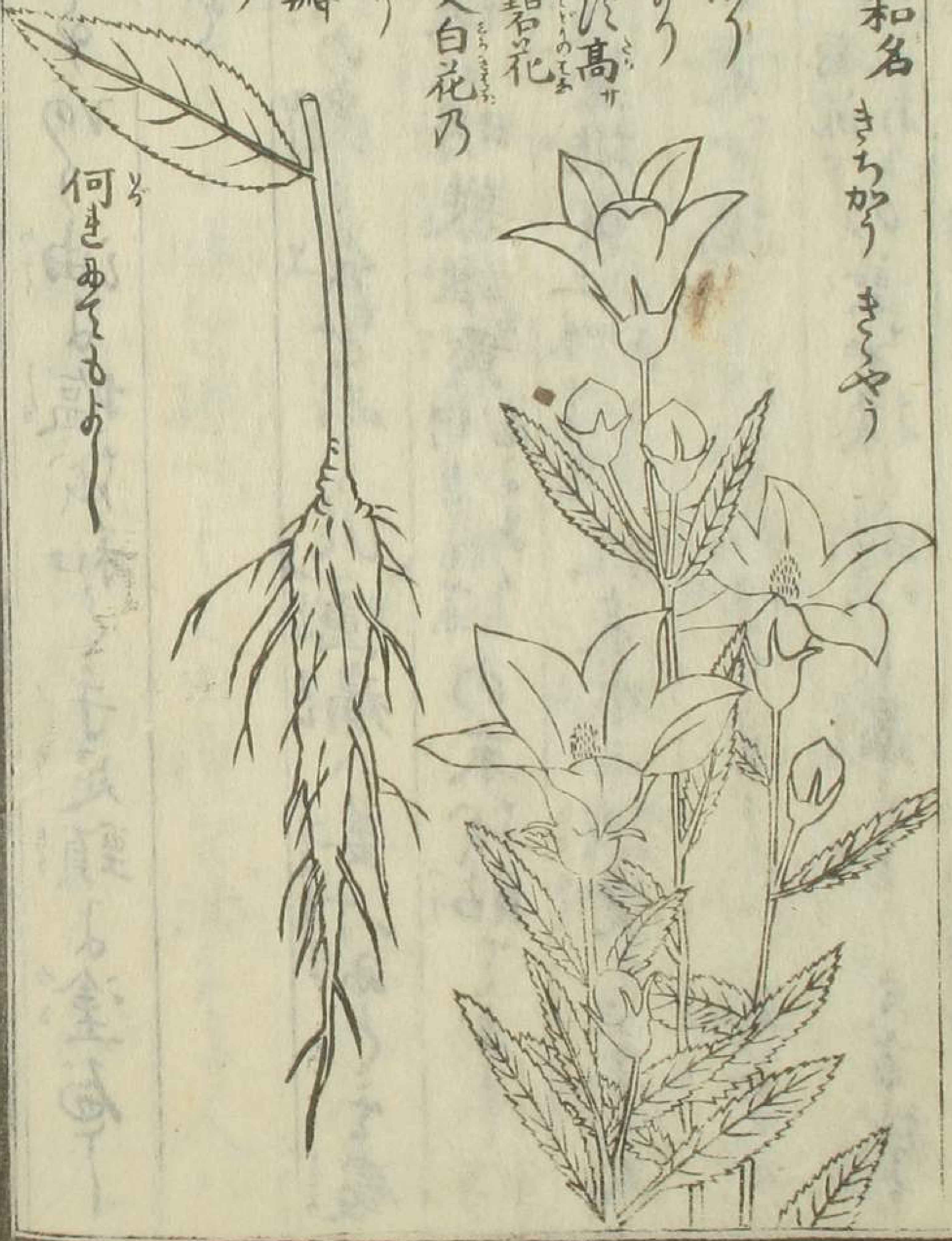
くある物二三文水に煮て咬処を度々洗べし
ちのり

桔梗

和名 きちかう ききやう

山野にあり春宿根より苗を生じ高さ一二尺秋碧花を開く又白花のものあり單瓣千瓣の別あり蛇咬なるに用ゆ

何にてもよし



馬齒莧

和名 すべりひゆ 又 むまひゆ

此草園野ともにあり春苗を生じ地に附て生じ葉青茎微赤惣躰柔らかにして滑に澤あり六七月細なる花を開き尖る小實を結ぶ

蛞蝓

和名 なめくぢり

濕地に生ずる虫なり蝸牛に似て殻なく行ときハ角を出す人家水甕の邊に最多し

青蒿

春苗を生じ冬枯る莖極て細小なり六七月淡黄の細ちいさき花を潤き粟粒の様なる實を結其葉茎花實ともに其氣甚芳し世草に黄花蒿に似たり黄花蒿ハ青蒿より葉麁く胡蘿蔔に似て深秋に至り花して色黄色になり青蒿ハ深秋まで葉も色青し

青蒿ハ莖瘦て堅し

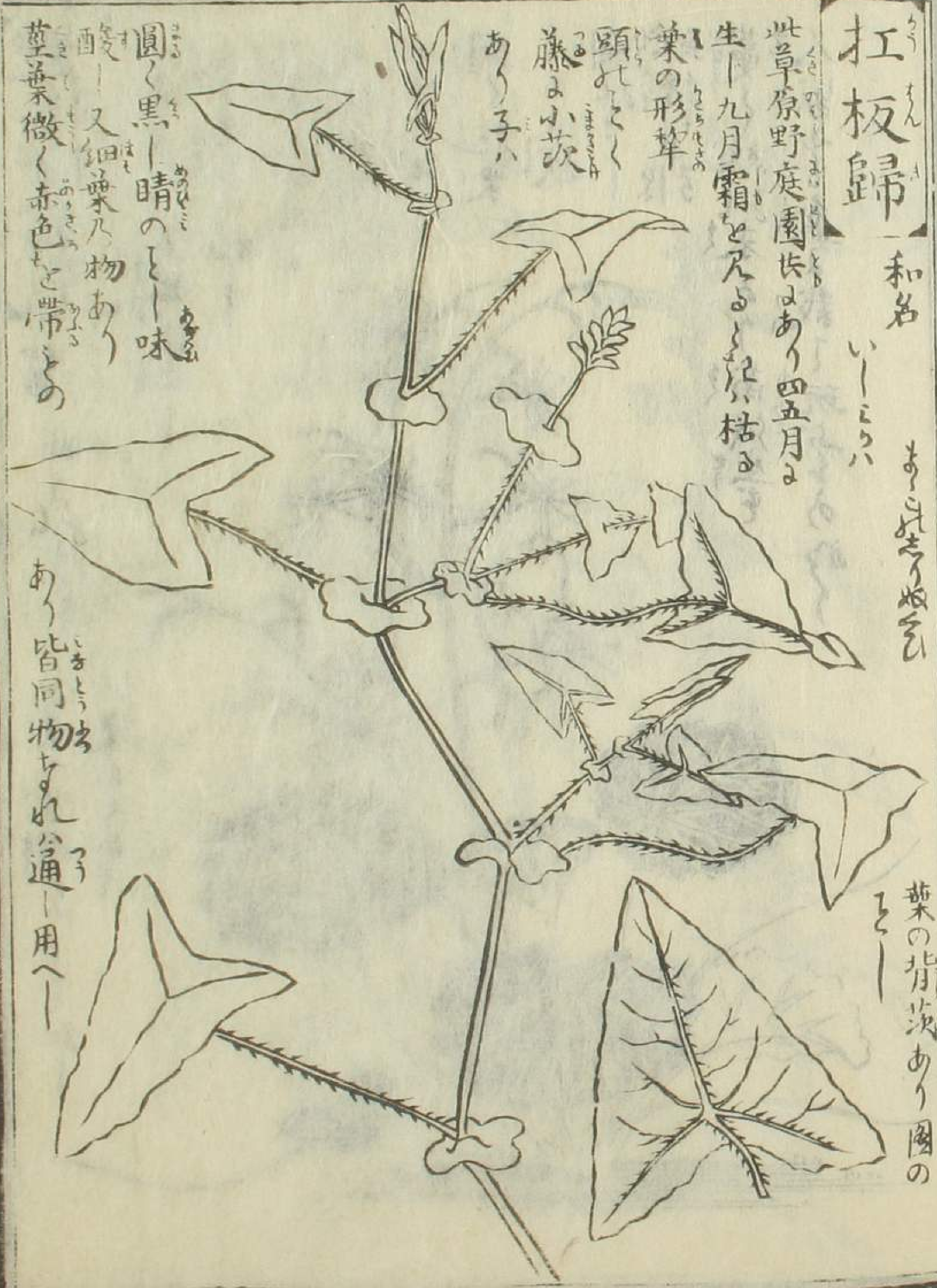
黄花蒿ハ茎肥て柔なり

杠板歸

和名　いしみかハ　まゝこのしりぬぐひ

此草原野庭園中にあり四五月に生じ九月霜をみるときハ枯る葉の形蕎麥頭のごとく藤に小莿あり子ハ圓く黒し晴のごとし味酸し又細葉の物あり茎葉微く赤色を帯るもの

あり皆同物なれバ通じ用べし



葉の背に莿あり図のごとし

金絲荷葉草

此草多く八石墻に生し冬に堪春の初めり苗長三四月に茎を出し小白花を開く花葉ともに状圓せとし紅絲を引蔓く絲も末より苗を生ぜ人家にも盆に栽て玩ぶものなり

和名 ゆきのした

ルウダ草

此草葉圓にして左右に刻あり秋の初に花さき色白くして細なり秋の末に細なる実を結び冬枯て復宿根より春に至て苗を生ず俗に耆婆三礼草と言時疫行はるとき門に掛置ば其災を免るゝと云

安斎信等曰
馬人ヲ咬ハ其熱大キク火ニテ焼ガ如シ甚イキレ苦シムモノ也是ヲ治ルニハ枡ノスミヨリ水ヲ呑シムベシ忽熱去リ痛軽クナル也枡又スベリ莧ヲツキクダラカシ煎シ呑ベシ疵ニハ栗子ヲカミクダキ付テヨシ
文久二戌七月五日
義哉方写

諸獸齧傷　毛ものにかまれやぶらるゝきずなり

牛馬齧傷ハ灰を熱湯中に入て傷處を漬すべし灰汁は盛置たる磁器を爐火の上にのせ置冷ざる様にすべし傷處爛たるハ三日許漬すべし若腫にいたらバ石を炙熱て熨にべし毎日兩度ぬして腫消て止○又方獨顆粟焼研て傳くべし○又方鶏冠血をとおほく傳てよし○又方白砂糖を封てよし

馬人の陰卵を嚙て脱とするハ急に推入烏鶏の肝 圖説後にあり を取細に剉く傷処に封せ包置外科に請て縫合すべし

家猪野猪に嚙たるハ松脂を火にて煉餅のごとくして傷處に貼べし

熊羆爪牙にて傷られ毒痛甚しきハ青布を燒て傷処を薫べし毒自然と出仍て葛根 圖説吐血の條にあり を濃煮て其汁にて洗且乾葛根を末として葛根の煮汁にて服すべし毎日五次程服し夜ハ一次服すべし ○又方蔓青根乃絞汁を多服してよし ○又方獨顆栗燒研て傳べし ○又方朔雚 圖説前の攧撲打出ス 一大把許剉し水一升に漬し置須臾して汁を飲且其滓を傷処に傳べし

鼠に咬たるハ先急に焰消を傷處に封付置て火を点じ是ハ火を發し毒火に随て散る

なり其後に麝香（生薬店にあり）を傳て内に白躑
躅の花或は千屈菜（二種共に図説後編にあり）を煎じ服を
べし多服するもよし若焔消なきときは
き八血を絞り出し或は熱き湯の中へ傷處
を浸し或は牽牛藥（人家園庭に栽る蔓草なり）を揉て咬處
に傳く後に右の服藥を用ゆべし ○又方黏
鳥（とりもちなり）を擣れに釜臍墨をまぜて貼てよし
○又方桐の木（木屐に用る桐なり）を焼細末としめし糊

にわしまぜ封くよし ○又方牡蠣（蛎殻の末なり薬店にあり）石灰黄栢乃末三味等分にして蘩縷
の汁（図説前の欄に撲りあり）によくよく和てぬるべし
鼠に數品あり其中に毒最甚しきあり人若此
鼠に咬るる時は傷處速に愈く當分無事なる
もみへなしども數日を経て俄に大熱を發し赭
疹多出傷寒のごとく煩渇く甚しき體中に紫黒の
班紋を見し狂躁極く死するあり又八日と午
後寒熱を發し労瘵のごとくなるものあり又其
何故となく時に寒暖にかはり或は赤豆蕎麦等
の物を食しかるる後に寒熱瘧のごとくなる事數
年に至るも絶ずかの種々名状し難き証を見すことの
なりも鼠毒肉攻又は皮肉の間に在く患をな

る者にして皆咬まれたる初に療法を誤りしより
起る大抵膏薬に鉛粉等の品入たるハ貼べから
ず傷處速に愈ますとも毒外へ泄ざるゆへ後
に内攻して右様の大害をなすことあり愈たり
とも禁忌を守ざれバ必再発して
救がたし恐べく慎べし

猫に咬たるハ薄荷 図説小児の條にあり を搗て汁を取
く傷處に塗べし○又方蜀椒を剉み水に浸
し置き莽草葉 下に図説あり を末となし右の
蜀椒乃水にて調て咬處へ付べし○又方鶏
冠雄黄 薬店にあり 末となし水にて服し其上

に咬たる処へ塗べし○白躑躅 図説後にあり の
花煎じ服すても亦よし○白果 食料になにと のなりいちやう
の木の實を搗爛して傷處に封べし

常犬に咬たるハ砂糖を咬こなる處へ塗てよし
○又方急に風なき處にて傷處の血を嘲去
小便にて洗浄熱牛の屎を付てよし○蓖
麻子 図説急喉痺の條にあり 五十粒殻を去水にて研膏乃
ごとくし先塩水にて咬る處を洗次に右

此薬を敷貼てよし○又方白礬（薬店にあり）を末
として咬たる処に掺て布にて裹べし○
又方青柚子の青き所を擦く咬たる処に貼
置し猘児の咬たるに最よし

舊瘡ある人狗涎瘡口に入る

と是ハ昏悶するに
に至る者あり急に蜀椒を浸したる水にて
莽艸（中國說は艸にあり）葉の末を調て塗てよし

瘈狗に嚙

まるハ急に瘡口より血を絞り出
る事あり是ハ瘡口の四圍を鍼にて刺血を多
く絞出し次に手ならバ肘の邊脚さき
ならバ膝頭より人に小便を志かけさすべし
かゝり多く志かゝる程よし是最其小
便瘡口の處へ流るゝ様にして洗べし
其後又胡桃殻を二つに割肉を去て半
片の内へ胡桃の殻なきときハ竹を輪に截て中へ人乃糞を填く其上へ灸すべし
人の糞を填満て傷所へうつむけに掩ふせ

置其上へ艾葉を大く撚のごとく灸すべし
其日百壮灸してのち艾炷大なる如胡桃殻
ハ焼て焦たる人糞ハ乾べし左なくバ幾度も
取換て灸すべし灸の後杏仁（このんまたは實中の仁なり薬店にあり）
を擂て泥のごとくし油にてとき厚く塗
封其表を布か木綿の類にて厚くつゝみ置
痂して瘡口より血水などを流出るをぬぐひ
とれ翌日杏仁を去て又前のごとく灸して

後に膽礬（薬店にあり金物を腐らすに用るものなり）を末とし瘡
口へ乾摻て浸み置べし其後ハ毎日膽礬
を酒にて洗ひおとして灸し灸して後又膽
礬を傳置事六七日にして血水出る間ハ灸
する事毎日百壮宛すべし血水出止たる時
灸を停て膽礬を洗去再最前のごとく杏仁
を塗て置べし（婦人小兒膽礬しみて堪がたくハ始末ともに杏仁を傳てよし）葱
の白根搗爛して傳るもよし
○内藥ハ急に杏仁壹匁馬銭

五分二味共に薬肆にあり水二碗入一碗に煎じて頻に少
しづゝ飲しむべし多く服すれバ煩悶しむことあり扨韭を搗
絞く汁を取一杯づゝ五六日に一度ほど服して
宜し○又方防風升麻葛根甘草各三分杏仁壹匁
五分○五味ともに薬店にあり水茶碗に二杯を一杯に煎服して最
よし豺狼に嚙るゝも此方よし○又方馬錢壹匁
水一茶鍾の内へ浸し置こと一時許して其浸
たる水を少ゝ宛飲一日に飲盡すべし○又

方生姜汁鐵漿右二味等分にして冷なる
まゝにて一合許づゝを飲べし○又方蝦蟆図説
下巻呑針條にみえたり生にて両股を切皮を去洗淨膾となし
して柚橘の類にてしらへ多く喫宜し○
又方羊躑躅図説後編にありの花煎じ服して花なき時
ハ葉を用てよし

○山野の中にて右に用たる薬もなき時
ハ先自分の尿をしめし紙にて拭置小刀にて

と衝傷て血を絞いだし扨鐵炮の口薬を
囓傷る創口の大ヶ置て火縄ゐて火を點
爲し火発すれバ毒も亦発ん家ゐ歸べく
前方を用爲し
總て瘈狗ヶ囓れる人嚴く禁忌を守べし
其法毎日灸ある時風を避爲し風瘡口
より入まバ變じて急症となる慎べし扨左
の食品を謹く喫爲からず

赤小豆　蕎麥　此二品ハ三年の間食を爲からず　胡麻
麻人　索麪　芋　魚類川魚最忌べし
油煠の類　一切酢の物　青梅るけて
あさつき　右ま百日の内食ふ爲からず　酒　一年飲爲からず　犬肉
終身食ふ爲からず
右法方何もちし凡此瘈狗傷ハ初ヶ埋療
を誤バ毒ぬけずして遂ヶ死するに至る
良醫も療を施ごさし又初の法ハ適と

いへども後に禁忌を守らざれバ再發して救ふ
べからず恐べく慎べし僻邑山家などの急に
良醫のあらざる時の爲に理法始末の心
會を識せるなり

瘈狗に嚙傷ある人大に憎寒をなし大熱
を發し或ハ傷寒のごとく口噤牙を咬角弓
反張口涎沫を吐汗出睾丸縮大小便不通
舌巻食下らず或ハ狂犬の吠が如く聲を發

死せるもあり故に理療を忽にすべからず
狂犬の形状ハ尾を垂下眼赤舌黒涎を流し舌
を出喘おほくハ頭をさげむけ走るハ狂犬也
途中にて此に遇バ速に避遁し若避難き時ハ
急に棒を操く犬の前脚を横に拂撃べし犬倒
るゝ間に逃去べし或ハ犬の両眼の間を見す
まして力を極く打べし犬立に死ルを知べし
漫に打バ却て犬手元に廻り咬ものなり○凡
常の犬も亦夏月炎天の節ハ口開く喘ものあれ
とも舌の色黒からず且眼中も赤からざるを
異なりとす

諸獸諸蟲に咬傷され痛極

勢危きものハ皆艾を
もつて咬傷たる處に灸すべし毒氣を抜散

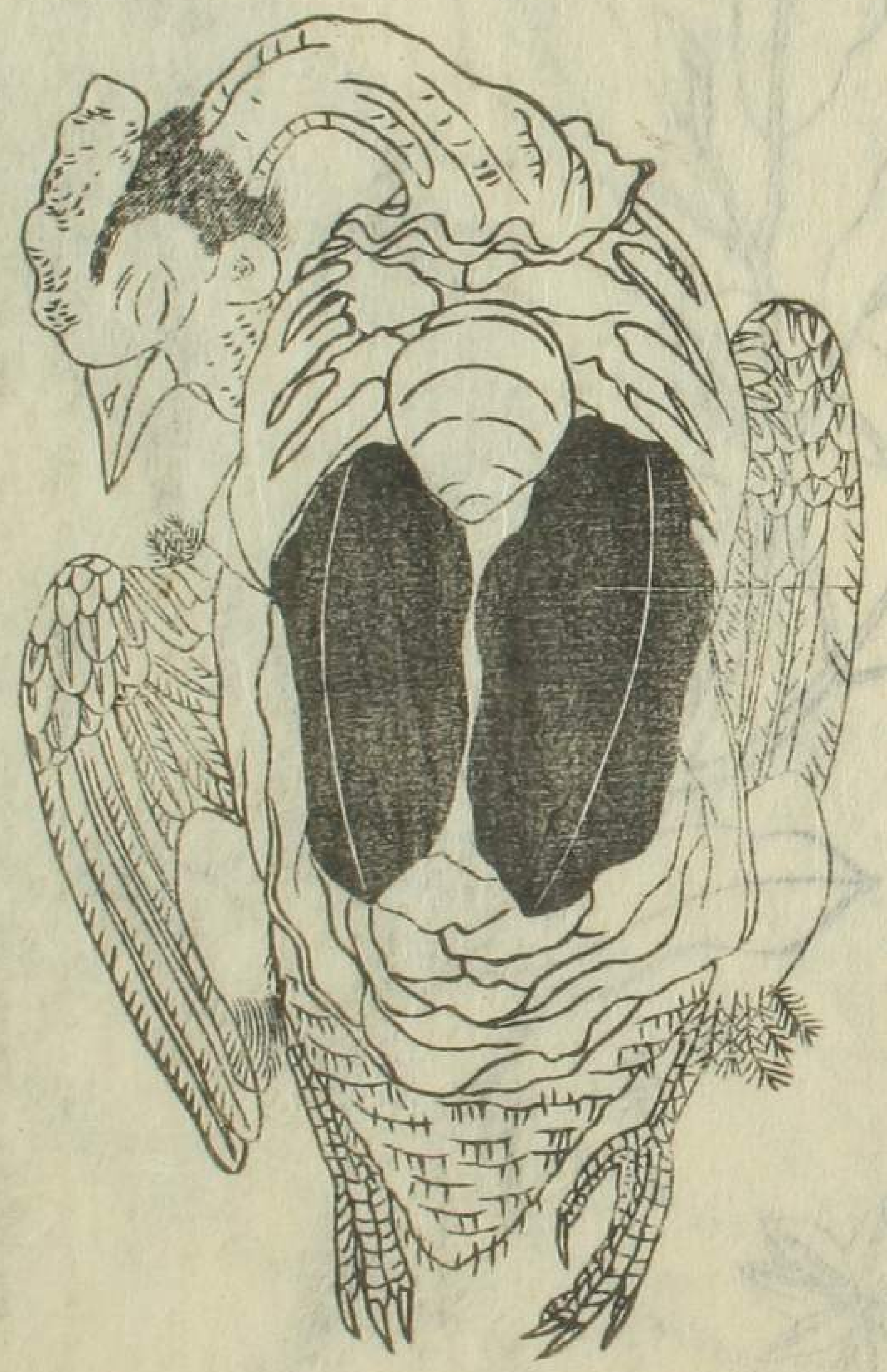
して安し或ハ大蒜一片を其処に布きて上に大艾炷にして二三壮灸してよし蒜爛れば取換て灸すべし毒甚しきハ五十壮に至るべし

水虎又かつぱともいふ

と相撲して人正気を失ひて煩ふあり莽草此木図説後にありの皮を剥ぎて末にし水に拌呑しむべし仏前に供る抹香を服ひてよし忽正気に成て本復ス

鷄肝

鷄のきもなり



きもとハ是なり腹を割り開ハ直に見ゆ色黒紫にして状図のごとし

莽草

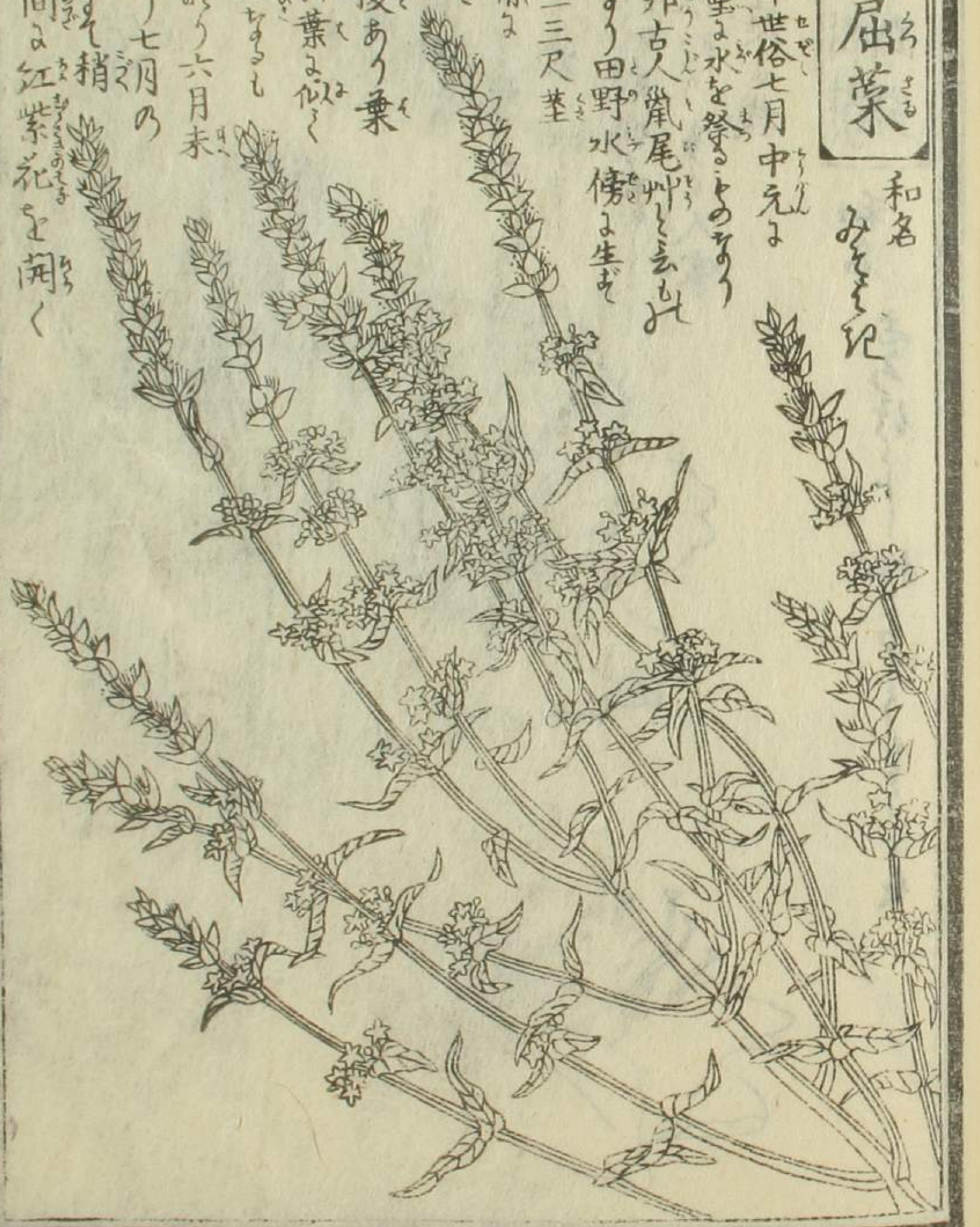
和名　志きみ　四時ともに葉あり葉に光りあり厚し木れ高さ六七尺より一丈許に至る花も紅にして杏の花ほど大きさほどなく六出なり此邦の人抹香となし佛前に焚しものなり

実の状かくのごとし

千屈菜

和名　みそゝぎ

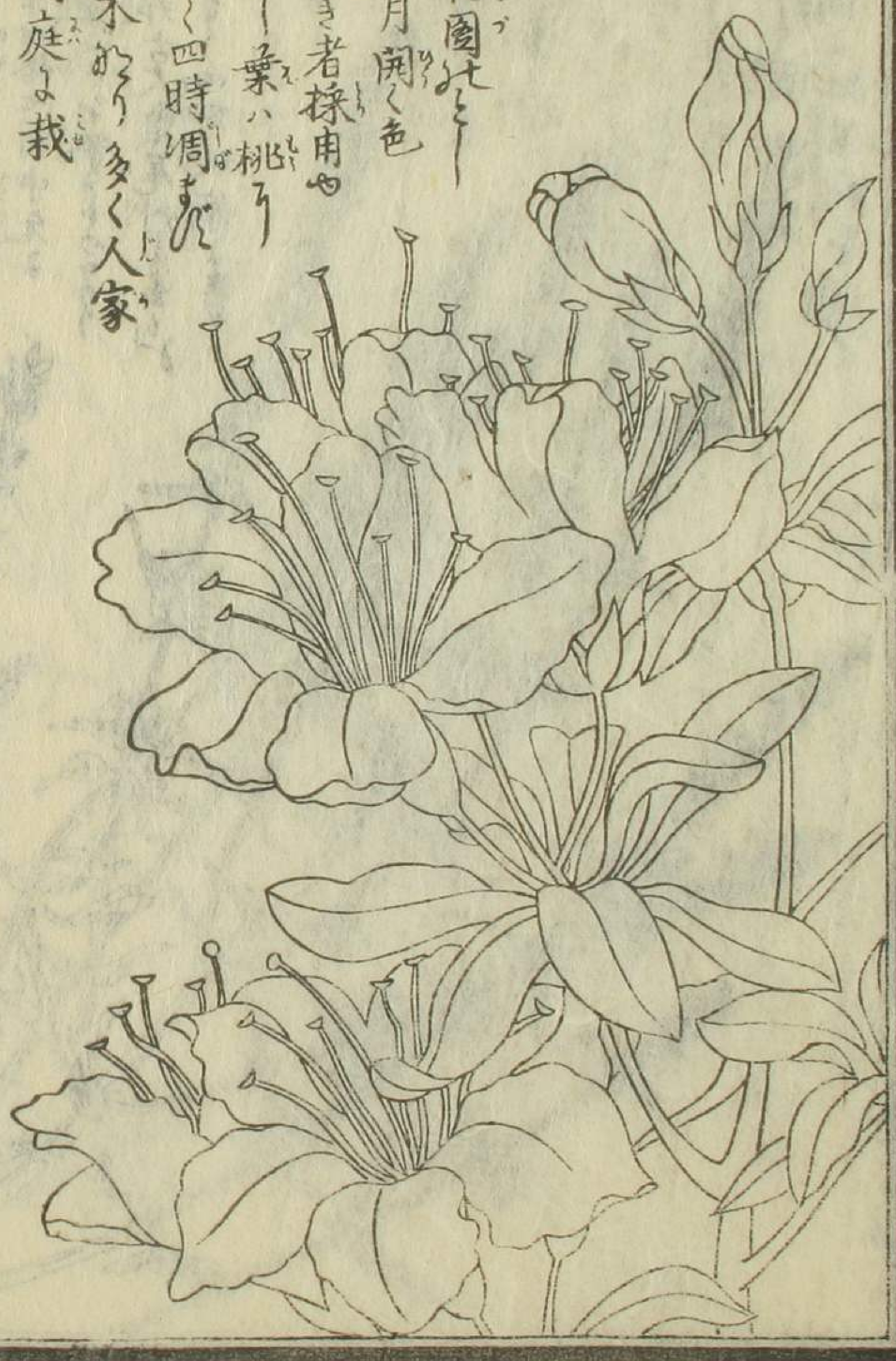
此草世俗七月中元に先靈に水を祭るものなり本邦古人鼠尾艸と云ものは是なり田野水傍に生ず高二三尺茎四角にして四稜あり葉柳の葉に似て短小なるものなり六月末より七月の末まで梢の間に紅紫花を開く



白躑躅

花園みとし
三月開く色
白き者採用ゆ
べし葉ハ桃ニ
似て四時凋まず
小木なり多く人家
園庭に栽

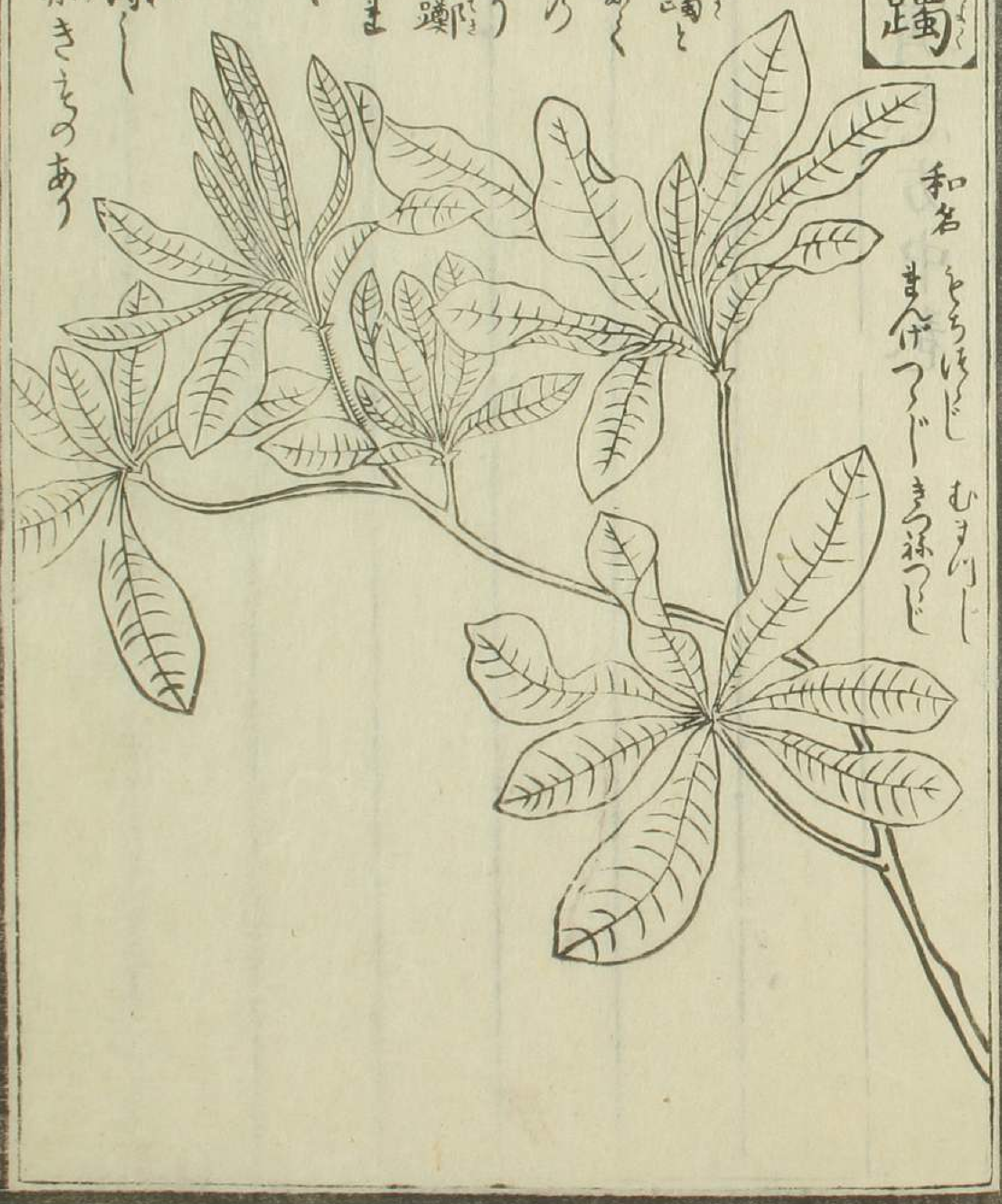
和名 志ろつゝじ 俗にまるきつゝじとも云



羊躑躅

前の躑躅と
同種類めく
たゞ花の
色黄なり
葉常の躑
躅に比ぶれ
バ本細く
末濶し
つや無く
して薄し
又花赤きものあり

和名 もちつゝじ むまつゝじ
れんげつゝじ きれんげつゝじ



廣惠濟急方中卷